

目次

第1章	はじめに	4
第2章	本研究の研究対象.....	5
第3章	先行研究	7
3.1	日本語学における「ジャナイデスカ」の用法について.....	7
3.2	「ジャナイデスカ」の日中対照研究.....	12
3.3	「ジャナイデスカ」の習得研究.....	14
3.4	先行研究の成果と課題.....	17
第4章	研究方法および研究目的.....	17
第5章	コーパスを用いた「ジャナイデスカ」の使用傾向に関する調査.....	18
5.1	日本語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用傾向（BTSJ コーパス）	18
5.2	日本学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向.....	20
5.2.1	学習者の縦断的な発話データ—C-JAS コーパスについて.....	20
5.2.2	調査目的.....	21
5.2.3	分析方法.....	21
5.2.4	分析結果.....	22
5.2.5	C-JAS コーパスにおける、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向	28
5.3	横断的なコーパス調査.....	29
5.3.1	KY コーパスについて	29
5.3.2	調査目的.....	30
5.3.3	分析方法.....	30
5.3.4	分析結果.....	30

第 6 章 「ジャナイデスカ」の使用に関するアンケート調査.....	34
6.1 予備調査	34
6.1.1 調査時期.....	34
6.1.2 調査協力者.....	34
6.1.3 調査方法.....	34
6.1.4 予備調査の結果.....	35
6.1.5 予備調査による変更点.....	36
6.2 本調査	37
6.2.1 調査概要.....	37
6.2.2 調査協力者の構成.....	38
6.2.3 研究課題.....	40
6.2.4 調査内容と方法.....	41
6.2.5 調査結果.....	43
6.2.5.1 テストの数値化結果.....	43
6.2.5.2 分散分析の結果.....	46
6.2.5.3 分散分析の結果のまとめ.....	49
6.2.5.4 文完成テストにおける「ジャナイデスカ」の使用パターン.....	49
6.2.5.5 文法性判断テストの結果.....	53
6.2.5.6 協力者の個人内の知識と産出について（フォローアップインタビューの結果から）.....	53
6.2.5.7 研究課題別の結果のまとめ.....	56
第 7 章 総合考察	57
7.1 「話し手の一方的な評価の提示」用法における母語の影響.....	57
7.1.1 中国語における「不是…吗」と「ジャナイデスカ」との対照研究.....	57

7.1.2	韓国語における「잡아」と「ジャナイデスカ」との対照研究.....	60
7.1.3	英語における「Don' t you」と「ジャナイデスカ」との対照研究.....	63
7.2	「話し手の一方的な評価の提示」の用法の知識レベルと産出レベルにおける母語の 影響	64
第8章	本研究のまとめと今後の課題.....	66
	謝辞	69
	参考文献	70

第1章 はじめに

(1)「駅前にコンビニがあるじゃないですか、あそこの弁当、最近種類が多くなったみたいで、それに結構美味しいんですよ。(メイナード 2005)

日常の言語生活において、誤解を避け円滑に話を進めていくため、日本語母語話者が(1)のように、「ジャナイデスカ」を使って、会話参加者が互いに確かめながら共同で文や談話を作り上げていくことが多い(鈴木 2001)。

このような確認表現の習得は、外国人日本語学習者に対する談話教育において非常に重要であるといえるが、日本語教材で十分に扱われているとは言えない。筆者自身の経験を踏まえると、特に中国語を母語とする日本語学習者は、「ジャナイデスカ」の使用を避けることが多く、使用する際は、日本語母語話者に違和感を与えることがあり、必ずしも成功しているとは限らない。これらの現象は「ジャナイデスカ」に対応する中国語表現「不是...吗」の使用が常に「反駁」「非難」などといったようなマイナスのニュアンスが伴われ、その用法が「ジャナイデスカ」より制限されているという母語からの影響に原因があるのではないかという疑問が生まれてきた。

日本語コミュニケーションにおいて、否定疑問文としての「ジャナイデスカ」は単なる確認要求のためではなく、様々な目的で使われる(メイナード 2005)。中国語を母語とする学習者による「ジャナイデスカ」の各用法の使用にはどのような傾向があるのか、それはほかの言語を母語とする学習者と異なるのか非常に興味深いところである。

これまでの「ジャナイデスカ」を中心とする習得研究はほぼ韓国語を母語とする学習者に限られており、(奥野 2012・金 2000・鈴木 2004)ほかの言語を母語とする学習者の使用状況はまだ不明である。先行研究で使用されているデータを見ると、縦断・横断どちらかのデータのみを用いながら行われていることが分かった。

以上の背景を踏まえ、本研究では、縦断(C-JAS コーパス)・横断(KY コーパス)両

方のデータを用い、韓国語母語話者・英語母語話者と比較することで、中国語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用傾向の特徴を明らかにし、それは母語からどのような影響を受けるかを検討していく。

第2章 本研究の研究対象

本研究は「確認表現」という機能から出発し、「じゃないですか」「じゃないか」「じゃん」という3つの形式を同じグループとして扱う。

石井（1998）は「じゃないですか」「じゃないか」「じゃん」を否定の疑問文を形成する類似表現だと認識している。丁寧さの度合いが高いほうから順に並べると「じゃないですか・じゃないか・じゃん」のようになる。

「じゃないですか」と「じゃないか」は丁寧体か普通体かの区別で、意味用法上の区別はない。「じゃん」の出自と伝播の経緯に関しては、井上（1988）に詳しい。井上（1988: 44）は「じゃん」を方言起源の東京新方言として位置づける。語源は「では+ない+か」にさかのぼる。「では」は、かつて「じゃ」であった。「ない」は西日本では品詞により、「ない」だったり、「ん」だったりして混同された。これらをつなげれば、「では+ない+か」から「じゃ+ん+か」が生まれたことがわかる。さらに「か」は脱落しうる。結局「じゃ+ん+0」、つまり「じゃん」が生まれるわけである。若者の口語表現として位置付けられる「じゃん」は外国人日本語学習者に対する日本語の基本の文型指導の中で扱われることはほとんどないと思われるが、学習者は様々なメディアや日本語母語話者とのやり取りの中で身に着けられているようである。

東京新方言として位置づけられる「じゃん」そのものに焦点を当て、用法や談話上の機能について論じた研究に松丸（2001）、嶺田（2001）がある。松丸（2001）は、20代後半・男性を対象し、彼らの内省に基づいて、「じゃん」に言及し、「じゃないですか・

じゃないか」の用法を持つが、情報提供機能を果たすものだけに限られるとしている。しかし、松丸（2001）の分析は内省的手法によるものだけに、その適切性の判定にはやや疑問を感じる点がある。嶺田（2001）は共通語としての「じゃん」の用法を分析した上で、愛知県東部方言における「じゃん」の用法との比較を行った。首都圏における「じゃん」の用法を考察するために、テレビ番組の中で若年層の中のクレントの発話、東京都町田市出身の24歳・女性の発話、世田谷区出身の22歳・女性の発話を用いた。結果として、首都圏における「じゃん」の用法は以下のようにまとめられる。

a.聞き手に対して、話し手の意見を押し付けたり、アドバイスしたりする用法。

(2)「子供じゃないって言ったじゃないか」

b.話し手の主観的な気持ちや意見を述べたりする用法。

(3)相手に反論して「話が違うじゃん、それじゃ」

c.客観的な状況を述べる用法。

(4)レポートの提出日を聞いたところ相手が「そこに書いてあるじゃん」

以上の内容をまとめてみると、形式上、「じゃないですか・じゃないか・じゃん」は異なっている。特に「じゃん」は東京新方言として、「じゃないですか・じゃないか」の変異形だと認められる。また、この三つの形式は丁寧さの度合いから見ると、高い順に「じゃないですか・じゃないか・じゃん」と並べられる。用法としては、「じゃないですか・じゃないか」と「じゃん」が重なる用法がある。本研究はその重なる用法を対象にして考察するので、この三つの形式を一つの「ジャナイデスカ」とする。

上述したことに基づき、本研究の研究対象の形式は以下の①～③とする。

① じゃないですか

② じゃないか

③ じゃん

尚、「ジャナイデスカ」は現代日本語における口語表現として、会話でよく使われるため、本研究は話し言葉の会話で出現する「ジャナイデスカ」を研究対象とする。

第3章 先行研究

中国語を母語とする日本語学習者における、「ジャナイデスカ」の使用傾向上の特徴を明らかにするため、本研究は日本語学における「ジャナイデスカ」に関する研究・日中対照研究における「ジャナイデスカ」に関する研究・第二言語習得における「ジャナイデスカ」の習得研究という3つの観点から先行研究をまとめる。まずは「ジャナイデスカ」の用法から見ていく。

3.1 日本語学における「ジャナイデスカ」の用法について

「ジャナイデスカ」については、田野村（1988）は意味のみならず構文・音調上でも区別されるものとして、以下の第一類～第三類の三種類に分けた。具体的には以下のようになる。

第一類の「ジャナイデスカ」は、発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。「ない」を含むとはいえ、前に来る表現の内容が否定されるわけではない。文の末尾の「。」は文末音調の下降を表すものである。

第二類の「ジャナイデスカ」は、推定を表現する。この場合も、話者は前の表現の内容を否定しておらず、寧ろ、それを認める方に傾いている。文末の音調は上昇である。

(5) の文例は第二類の「ジャナイデスカ」の文例である。

第三類の「ジャナイデスカ」においては、「ない」が否定辞本来の性格を発揮する

(6)の文例は第三類の「ジャナイデスカ」の文例である。

(5) (不審な様子から) どうもあの男犯人じゃないか？

(6) (1は素数でないことを教えられて) そうか、1は素数じゃないか。

90年代、「ジャナイデスカ」は「だろう」「よね」などと比較しながら、確認要求の用法に焦点を当て論じられることが多かった(蓮沼 1995、三宅 1996)。これらの研究は基本的に「ジャナイデスカ」の用法として「確認要求」を立て、「ジャナイデスカ」の形態や意味・機能などについて考察してきた。

一方、2000年代になると「確認要求」の機能だけが注目され、形式自身の基本的な意味・機能と、確認要求とそれ以外の用法との関係などについてはあまり論にないという問題意識を持ちながら、「ジャナイデスカ」の用法全般に関する考察が現れるようになった。(張 2004・劉 2008)

張(2004)は、「聞き手との共通認識の要求性の有無」という分類基準を設定する。

「聞き手との共通認識の要求性の有無」とは、聞き手の認識し得る情報を提示して話し手と共通的な認識を聞き手に要求するか否かということである。「ジャナイデスカ」を聞き手に「共通認識を要求しない場合」と「共通認識を要求する場合」とに分け、「共通認識を要求しない場合」として「発見」「評価の提示」「判断結果の提示」「自己所有情報の想起」といった用法を挙げ、「共通認識を要求する場合」については「共有知識の確認要求」「認識の同一要求」の二つの用法を挙げている。

劉(2008)は張(2004)の分類基準の上にさらにもう一つ「認識生成現場性の有無」という基準を加えた。「認識生成現場性の有無」とは、命題内容に対する話し手の認識が発話時以前に存在しておらず、発話現場で新しく生成することを意味する。例えば、

(7)と(8)は張(2004)の分類基準に従って、どちらも「聞き手との共通認識を要求する」の場合の「共有知識の確認要求」に属するとしている。しかし、「認識生成現場性の有無」という基準から考えれば、2つの文を同じ用法に分類するのは不適切なので

はないかと思われる。劉（2008）が指摘するように、(7) の命題内容は「昔の話」なので、双方の発話時以前の記憶の中に存在する情報であり、「記憶喚起」の場合に分類すべきである。それに対して、(8) の命題内容は発話現場で新しく生成するもので「新規生成」の場合に分類すべきである。

(7) 「昔は...おじいちゃんかおばあちゃんの送り迎えがないと学校に行かなかったじゃないか」

(『うちの子にかぎって』 記憶喚起)

(8) 洋子「家の近くだったら落ち着いて飲める」

ヒロシ「飲むだけならここでいいじゃないか」

(『お暇なら来てよね』 新規生成)

劉（2008）では、こういった「認識生成現場性の有無」と「対他的な要求性の有無」という2つの分類基準を用いて、「じゃないですか」類の用法分類を考察した。その結果は図1の通りである。

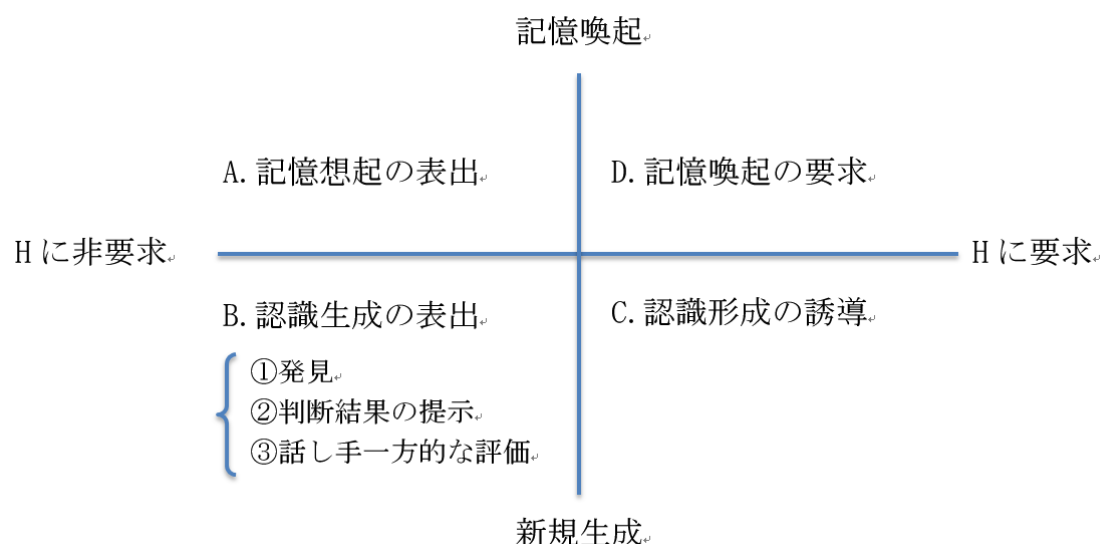


図1 劉（2008）による「じゃないですか」の用法分類

図1のアルファベットHは「聞き手」を表す。

以下に、各用法の定義や例文について説明する。

A:記憶想起の表出

＜記憶想起の表出＞とは、聞き手の存在を必要条件としない発話状況において、話し手が自分の記憶の中にすでにある情報を想起して表出する用法である。この用法はよくブログの書き手や小説の文における作者や主人公の心内活動を表す。

(9)「そうだ、この間、新しくできた理容室があったじゃないか」

(<http://mememori.cool.ne.jp/04zaregoto>)

B:認識生成の表出

＜認識生成の表出＞とは、聞き手の存在を必要条件としない発話状況において、話し手が発話現場で新しく獲得した知識・情報やその場で形成した意志・評価・判断などを表出する用法である。発話意図という観点から＜発見＞、＜判断結果の提示＞、＜話し手の一方的な評価の提示＞の3つの下位用法に分類される。

① ＜発見＞：発話現場で獲得した情報や把握した事態を驚きなどの感情を込めて表出する用法。この用法は聞き手に働きかけない独り言の場合に使われる。

(10)「あ、雨が降っているじゃないか。」 (劉 2008)

②＜判断結果の提示＞：発話現場で現れたことについて、話し手がよく考えた後、ある結論に到達したことを表す用法。

(11) これまでは日本農業のため、米だけは何としても守らなければならないと考えていた。しかし、おいしくて安い米があるならどこから輸入したっていいじゃないか、と

いう気になってきた。

(劉 2008)

③<話し手の一方的な評価>:発話現場で現れたことと話し手が想像することの間にギャップが存在し、そのことについて、話し手が驚きの気持ちを込めて一方的に評価や意見を表す用法。

(12) 美:「古いのよね、宵越しの金は持たない、とか言って...。」

純:「おっ、難しい言葉知ってるじゃないか。」

(劉 2008)

C: 認識形成の誘導

<認識形成の誘導>とは、具体的な状況や一般的な知識などに基づいて推論したものや、談話の話題とする仮定知識、話し手だけが知っていることを聞き手に提示して、同様の認識状態になるよう誘導する用法。

(13) 弘:「お前は八重ちゃん相手にしてろよ。」

誠:「(ムカッと) なんでだよ。」

弘:「八重ちゃんだって可愛いじゃないか。」(お暇なら来てよね)

(劉 2008)

D: 記憶喚起の要求

<記憶喚起の要求>とは、聞き手の存在を必要条件とする発話状況において、話し手が自分と聞き手の記憶の中に共有すると思われる認識を表出し、それを喚起させることによって聞き手に確認する用法である。

(14) 同級生に加藤さんっていたじゃないですか、背の高い男の子。

(蓮沼 1995 : 393)

本研究は「ジャンイデスカ」の用法を考察する際、より詳しくかつ全面的な用法分類

を行っている劉（2008）の研究を参考とする。

劉（2008）が指摘するように、「記憶喚起の表出」は話し言葉より書き言葉によく使われ、「発見」という用法は対話より独り言によく使用されることが分かった。本研究は話し言葉の対話を中心として行うので、この2つの用法を除外する。「判断結果の提示」「話し手の一方的な評価の提示」「認識生成の誘導」「記憶喚起の要求」という4つの用法を対象として考察する。

3.2. 「ジャナイデスカ」の日中対照研究

「ジャナイデスカ」と「不是…吗」の比較に言及している研究に、井上・黄（1996、2007）曹（2000）劉（2008）がある。井上・黄（1996、2007）では、「ジャナイデスカ」と「不是…吗」はいずれも発話時まで認識できていなかった（誤解していた、忘れていた）事柄の認識を表す表現として用いられると指摘している。日中両言語における、この2つの表現間の類似点を指摘しているが、相違点があるのか、あるとすればそれはなぜ生じるのかといったことには触れていない。

一方、劉雅静（2008）では、「認識生成現場性の有無」と「聞き手との要求性の有無」という2つの分類基準を設定し、「ジャナイデスカ」と「不是…吗」の比較し、用法間の対応関係を明らかにした。結果は表1の通りである。○は当該用法を持っているということを表す。×は当該用法を持っていないということを表す。

表 1 劉(2008)による「じゃないですか」類の用法分類及び「不是…吗」の用法との

対応関係

	「じゃない ですか」類	「不是… 吗」	例文
判断結果 の提示	○	○	<p>(11) これまでは日本農業のため、米だけは何としても守らなければならないと考えていた。しかし、おいしくて安い米があるならどこから輸入したっていい<u>じゃないか</u>、という気になってきた。</p> <p>(11') 为了日本的农业、人们常认为无论如何都必须保护大米、然而只要可以有好吃又便宜的大米先选择进口<u>不是也很好吗</u>?</p>
話し手の 一方的な 評価の提 示	○	×	<p>(12) 美：古いのよね、宵越しの金は持たない、とか言って...</p> <p>純：おっ、難しい言葉知ってる<u>じゃないか</u></p> <p>(12') ? 噢、这么难的词你<u>不是都知道吗</u>?</p>
認識生成 の誘導	○	○	<p>(13) 弘：お前は八重ちゃん相手にしてろよ</p> <p>誠：(ムカッと) なんでだよ</p> <p>弘：八重ちゃんだって可愛い<u>じゃないか</u></p> <p>(13') 八重<u>不是挺可爱的吗</u>?</p>
記憶喚起 の要求	○	○	<p>(14) 同級生に加藤さんっていた<u>じゃないですか</u>、背の高い男の子。</p> <p>(14') 同学中<u>不是有一个叫加藤的吗</u>? 个子很高的那个男孩子。</p>

表1から分かるように、「話し手の一方的な評価の提示」の用法には、「ジャナイデスカ」が使えるのに対して「不是…吗」は使えない。

上述の研究はいずれも日本語の表現としての「ジャナイデスカ」の用法分類を基準として、日中両言語におけるこの二つの表現の対照研究を行った。結果から、中国語の表現としての「不是…吗」の用法は「じゃないですか」類より制限されていることが分かる。

一方、曹（2000）は中国語の文法記述を参考にし、情報管理理論、およびモダリティの視点から、日本語の「ジャナイデスカ」との比較を通し、中国語の反語文でもある「不是…吗」の機能と用法を明らかにした。結果としては、「不是…吗」の主な機能は、「意外」「注意を促す」「事実確認」「結論」であった。そして、日本語と比べて、中国語の「不是…吗」は「評価」の機能は持っていないこと、また、中国語の「不是…吗」は以上の機能を行う際は、常に「反駁」「原因追及」「非難」のようなニュアンスが伴われることを述べている。その中の「注意を促す」は劉（2008）の「認識生成の誘導」の用法は同じで、「事実確認」は劉（2008）の「記憶喚起の要求」と同様で、「結論」は劉（2008）の「判断結果の提示」と同様である。

つまり、中国語の文法記述から出発するにしろ、日本語の文法記述から出発するにしろ、この2つの表現の用法上の差異に関して、ほぼ同じ結果が得られる。しかし、中国語の「不是…吗」が含まれるマイナスのニュアンスは、日本語の「ジャナイデスカ」にはあまり感じられない。

3.3. 「ジャナイデスカ」の習得研究

筆者の管見の限り、「ジャナイデスカ」に関する習得研究は金（2001）生天目（2009）奥野他（2012）の3つである。表2は学習者の母語・学習者のレベル・使用するデータ

種類や調査方法・分析結果についてこの3つの習得研究をまとめる。

表2 「ジャナイデスカ」の習得研究

先行研究	学習者の母語	学習者のレベル	データ種類・調査方法	結果
金 (2001)	韓国語	初級から上級まで	KYコーパス アンケート調査	「じゃないですか」類の確認要求用法は、上級段階では習得され始めるが、まだ誤用は多く見られる
生天目 (2009)	特に統制されない。肉親に日本語母語話者がおらず、日本滞在経験が少ないという条件のもとに選出する。	特に統制されない	上村コーパス 日本語母語話者との比較から	日本語母語話者が確認要求という機能を行うとき、「じゃないですか」類を使うのに、学習者はあまり使わない。
奥野他 (2012)	韓国語	初級から上級	日韓共同理工系学部留学生に対する縦断データ 「学習者と母語話者との接触場面での談話」や 「母語話者同士の談話」	①会話において、学習者も日本人の友人も「じゃないですか」を用いることが明らかとなった。 ②韓国語話者が「じゃないですか」類を使って、段落を形成するにはいくつかのパターンが見られる。 ③母語話者からのインプットは習得に有効である。

金（2001）は確認要求表現として「よね」「だろう」「じゃないか」の3形式を取り上げ、韓国語を母語とする日本語学習者の習得程度や、中間言語的な規則性を探ることを試みた。さらに分析の対象を、質問と応答という談話形式と、自然会話の資料に基づいたアンケート調査に分け、考察した。結果は以下のようなものである。

- (1) KY コーパスの中の韓国人日本語学習者の確認要求表現「よね」「だろう」「じゃないか」の3形式は、上級段階では習得され始めるが、まだ誤用も多くみられる。
- (2) 質疑と応答という談話形式において確認要求表現の三形式の「よね」の使用が他の二形式より著しくみられる。
- (3) 「認識生成の要請」の用法として「だろう」「じゃないか」、認識生成のアピールの用法としての「じゃないか」の習得は不十分である。

生天目（2009）は丁寧体が基調となる会話において、日本語母語話者と日本語学習者の確認要求表現の使用を比較し、学習者が持つ特徴を探った。その結果、聞き手との共通認識を喚起するタイプの確認要求において、母語話者が「よね」「ではないか」を使用しているのに対し、学習者は用法的・待遇的に不適切な「ね」「だろう」を用いることが分かった。

上記の研究はいずれも「確認要求」の機能から出発し、単文における、「よね」「だろう」「じゃないか」の三形式に焦点を当て日本語学習者の習得状況を明らかにしている。一方、奥野他（2012）は「じゃないですか」を段落で話せる上級レベルになった際に出てくる特徴的な表現の1つだと認め、段落レベルの検討も行っている。そして、韓国語を母語とする日本語学習者の発話の段落において、「じゃないですか」の後ろに現れる表現がパターン化していることも指摘している。使用データとして「①学習者の縦断的な発話」に加え、「②学習者と母語話者との接触場面での談話」や「③母語話者同士の談話」の3つのデータを用いてインプットの影響を持っている。分析の結果、学習者も

学習者と日常的によく接している日本語母語話者も「じゃないですか」を用いていることが明らかとなった。そして、「共通認識を要求する場合」の「じゃないですか」の後続部では、「指示詞の使用」、「類似表現による言い換え」、「確認要求の直前の語の繰り返し」、「倒置による説明の付加」などが見られ、話し手がターンを維持し長い発話にするために用いている可能性が認められた。これらのことから、学習者は母語話者である友人との会話などのインプットの中から、「じゃないですか」を段落形成や談話形成に役に立てていることがうかがえた。

3.4. 先行研究の成果と課題

以上のように、「ジャナイデスカ」の習得に関する先行研究を概観してきたが、ここで問題点を整理する。

ここまでの「じゃないですか」類を中心とする習得研究の調査対象はほぼ韓国語を母語とする学習者に限られており、ほかの言語を母語とする学習者による「ジャナイデスカ」の使用状況はまだ不明である。

習得に影響を与える要因について、日本語母語話者からのインプットは「ジャナイデスカ」の習得に有効であることは検証されているが、学習者の母語のような他の原因が「ジャナイデスカ」の習得に影響を与えるかは不明である。

使用されているデータから見ると、縦断もしくは横断どちらかのデータを用いながら分析を行っていることが今の研究の実状である。

第4章 研究方法および研究目的

中国語を母語とする日本語学習者における「ジャナイデスカ」の使用上の特徴を明らかにし、それらの特徴は中国語からの影響を受けているかを検証するためには、言語転移に関する方法論を参考にしなければならない。

言語転移の研究は、これまで学習者の母語（第一言語）がどのように目標言語（第二言語）の習得に影響を及ぼすか、という観点で行われてきた。一般的に言語転移の分類には第二言語学習者の母語と目標言語の類似点が習得にプラスに作用する場合の「正の転移」と、相違点がマイナスに作用する場合の「負の転移」がある（迫田 1997）。

さらに、奥野（2005）は言語転移の認証方法に関して以下の3点を必要条件として挙げている。

- a) 言語構造を踏まえ、少なくとも3言語以上を対象とすること。
- b) ある特定の現象を扱う場合、母語にかかわらず学習者に共通して見られる可能性や、ある特定の習得レベルに出現するものである可能性があることから、習得レベルの統制に配慮すること。
- c) 第二言語習得過程には様々な要因が関与しており、言語転移はそれらの一つの要因であることを認識し、言語転移を取り巻く諸要因との関連性にも十分考慮すること。

以上の「ジャナイデスカ」に関する先行研究や言語転移の方法論を踏まえ、本研究は縦断・横断のデータを用い、韓国語母語話者、英語母語話者と比較することで、中国語母語話者における「ジャナイデスカ」の使用傾向を明らかにし、その使用傾向はどのような要因に影響を受けているかを検討していく。

第5章 コーパスを用いた「ジャナイデスカ」の使用傾向に関する調査

5.1 日本語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用傾向（BTSJ コーパス）

日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用実態を明らかにする前に、日本語母語話者の使用状況を確認する必要がある。「ジャナイデスカ」の使用に関して、男女差が存在していることが指摘されている（谷部 2016）。そこで、今回は BTSJ コーパスを利用し、日本語母語話者の男女別による「ジャナイデスカ」の使用状況を見ていく。選定

されるデータは「親しい同性友人同士男女雑談」の 19 会話である。

本研究は ChakiNET¹の文字列検索を用い、「じゃないですか」を含む文を抽出する(否定文、引用文を除く)。それらの文における用法・機能を先行研究に基づいて分析する。

以下の表 3 は ChakiNET によって抽出した日本語母語話者の男女別による「ジャナイデスカ」の各形式の使用状況である。

表 3 日本語母語話者男女別による「ジャナイデスカ」の各形式の使用状況

性別 \ 形式	じゃないですか	じゃないか	じゃん	合計
	男性	0	11	96
女性	0	1	89	90

選択されるデータは「親しい同性友人同士男女雑談」なので、男性であれ女性であれ丁寧度が高い「じゃないですか」の出現回数は 0 回である。また、「じゃないか」という形式に関して、男性は合計 11 回使っているのに対して、女性は 1 例しか観察されなかった。「じゃん」に関して、男性と女性の間には著しい差は見られない。

次に日本語母語話者の男女別による「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況を見てみる。

¹ ChaKi.NET は、複数の KWIC 検索方法を提供しており、StringSearch はその中で最も手軽に KWIC を作成することのできる検索法になります。

表 4 日本語母語話者男女別による「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況

性別 \ 用法	判断結果の提示	話し手の一方的な評価の提示	認識生成の誘導	記憶喚起の要求	合計
男性	13 (11.5%)	39 (38.9%)	41 (37.2%)	14 (12.4%)	107 (100.0%)
女性	13 (14.0%)	30 (29.9%)	34 (41.1%)	13 (15.0%)	90 (100.0%)

「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況からも、男性と女性間に大きな差は存在しないことが分かった。どちらのグループも「認識生成の誘導」「話し手の一方的な評価の提示」「記憶喚起の要求」「判断結果の提示」という使用頻度が高い。

以上の結果をまとめてみると、日本語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用には、男女差があるが、その差は「ジャナイデスカ」の各用法の選択に存在するわけではなく、各形式の選択に存在することが分かった。本研究は形式ではなく、用法・機能をメインとして行うので、今後、学習者に対する調査を実施する際には、男女差という要因を特に考慮しない。

5.2 日本学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向

5.2.1 学習者の縦断的な発話データ—C-JAS コーパスについて

C-JAS コーパスは国立国語研究所が開発して、日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の発話コーパスである。このコーパスは中国語・韓国語という2つの異なった母語の学習者を約3年間調査して収集した縦断のデータである。本研究は自然談話において、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の縦断的な使用状況を確認したいため、

C-JAS コーパスを選定する。C-JAS コーパスの具体的な概要は以下の通りである。

調査協力者は中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者3名ずつからなる。学習者の日本語学習環境は日本における教室環境に限る。来日1年目の時、すべての学習者は同じ日本語学校に在籍する、2年目以降、学習者によって大学、専門学校、言語学校それぞれの教育機関に進学する。コーパスの調査時期は学習者の日本語学習歴3か月から約3年間（3～4か月ごとに調査を行う）である。データの内訳として、一人につき7～8回（1回約60分）総データ量は47本（計約46時間30分、約57万語）調査形式は日本語母語話者と学習者との自由会話形式である。

5.2.2 調査目的

本研究は縦断的なコーパスを利用して、以下の3つのことを明らかにする。

- a) 中国語話者・韓国語話者の各時期における「ジャナイデスカ」の使用回数を確認する。
- b) 本研究の「ジャナイデスカ」の用法・機能分類に基づいて、中国語母語話者・韓国語母語話者の各時期における「ジャナイデスカ」の使用を用法ごとに分類する。
- c) 中国語話者・韓国語話者の各時期における、「ジャナイデスカ」の不適切な使用を抽出し、不適切な使用の原因を分析する。

5.2.3 分析方法

C-JAS の文字列検索を用い、「ジャナイデスカ」を含む文を抽出する（否定文、引用文を除く）。抽出した文を EXCEL に入れて、それらの文中での用法・機能を劉（2008）の用法分類に基づいて分析する。

5.2.4 分析結果

結果①：中国語母語話者・韓国語母語話者の各時期における「ジャナイデスカ」の使用回数

来日後の各時期における、中国語母語話者・韓国語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用回数に基づいて図2を作成した。

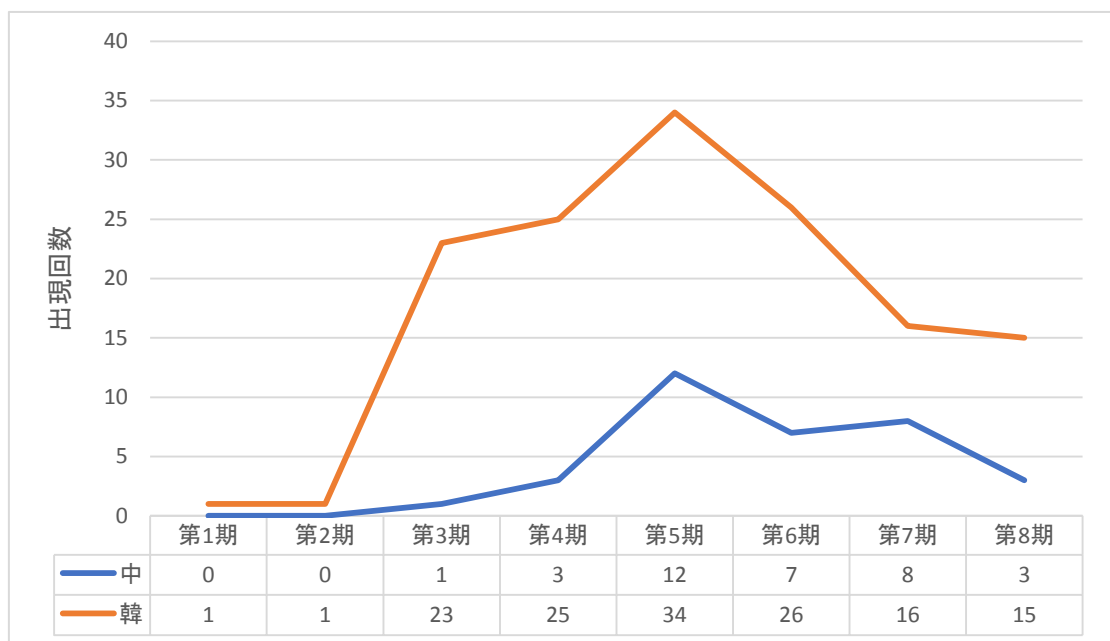


図2 中国語話者・韓国語話者の各時期における「ジャナイデスカ」の使用回数

「ジャナイデスカ」の使用頻度に関して縦断的な分析結果から、中国語母語話者と韓国語母語話者はほぼ同じ”山形”(奥野他 2005)のような使用傾向が観察された。しかし、「ジャナイデスカ」の出現時期や来日後各時期における使用回数は学習者の母語別によって異なっている。具体的には以下の a)～b) にまとめる。

- a) 中国語母語話者・韓国語母語話者は「ジャナイデスカ」の不使用の段階から、一時的に多く使用する段階を経て、使用数は徐々に減少していくという共通的な使用傾向が見られる。

- b) 「ジャナイデスカ」の出現時期から見ると、中国語話者のほうが韓国語話者より遅い。
- c) 使用回数から見ると、来日の各時期においても、中国語話者の使用数は韓国語話者より非常に少ない。

韓国語母語話者の使用数を基準として、中国語母語話者の使用数が少ないことを判定するのは難しいため、追加データとして、インタビューサーである日本語母語話者の使用回数も数えた。結果は以下の図3になる。

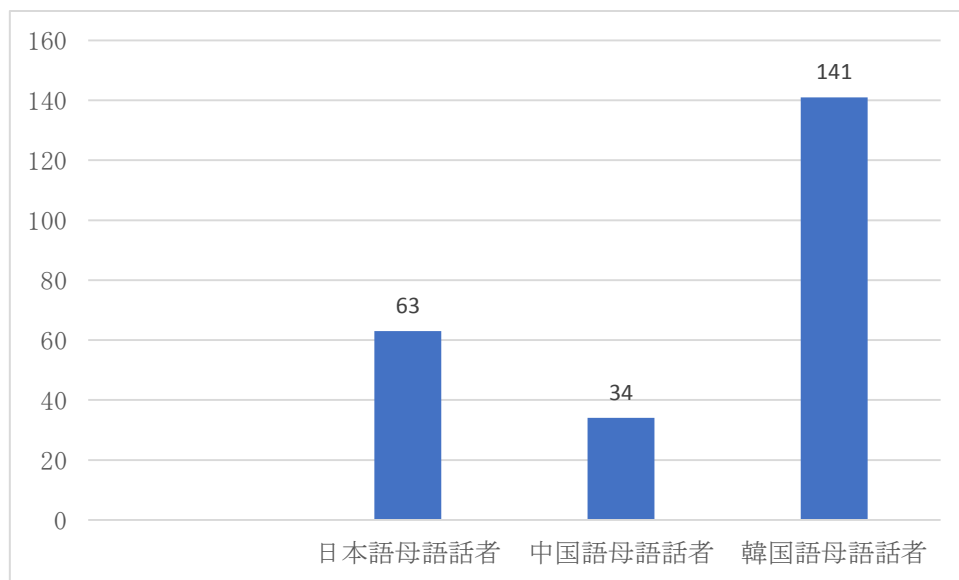


図3 日・中・韓国語話者による「ジャナイデスカ」の使用回数

図3から分かるように、日本語母語話者は全体で「ジャナイデスカ」を63回使用したのに対し、中国語母語話者は34回使用し、韓国語母語話者は141回使用していることが分かった。Schachter(1974)が指摘しているように、学習者の第一言語と第二言語のある言語項目の構造や使い方に違いがある場合、第二言語を使用する際にその違いのある項目をあまり使用しない現象である「回避」という現象がある。それに対して、学習者の母語と目標言語のある学習項目に類似点が見られた場合、その項目を過剰に利用してしまうことを「過剰使用」という。図3のデータから、日本語母語話者の使

用回数と比べ、中国語母語話者による「回避」、韓国語母語話者による「過剰使用」という現象があることがうかがえた。

結果②：中国語母語話者・韓国語母語話者の各時期における個人内における、「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況

続いては質的分析を行う。今回は来日時期に従って、学習者個人内の各用法の縦断的な変化について分析する。まず中国語母語話者の使用状況を見てみる。ここでは3人の中国語母語話者の中で最も顕著な特徴が見られた C2 のデータを取り上げた。

表5 各時期における、中国語話者 C2 の「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況

		第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	合計
聞き手との共通認識を要求しない	判断結果の提示	0	0	0	0	0	1	1	1	3
	話し手の一方的な評価の提示	0	0	0	0	0	1	0	0	1
聞き手との共通認識を要求する	認識生成の誘導	0	0	1	0	8	4	3	1	17
	記憶喚起の要求	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	合計	0	0	1	0	8	7	5	2	22

次の表6は韓国語母語話者の3人の中で一番特徴的な K3 による、「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況である。

表 6 各時期における、韓国語話者 K3 の「ジャナイデスカ」の各用法の使用

		第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期	合計
聞き手との共通認識を要求しない	判断結果の提示	0	0	0	2	3	2	1	1	6
	話し手の一方的な評価の提示	0	0	1	3	5	3	2	2	16
聞き手との共通認識を要求する	認識生成の誘導	0	0	0	6	3	0	0	1	10
	記憶喚起の要求	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	合計	0	0	1	12	11	7	3	7	41

この表 5・表 6 から、中国語母語話者は第 3 期から「聞き手との共通認識を要求する」場合の「認識生成の誘導」という用法を使用し始め、第 6 期から「聞き手との共通認識を要求しない」場合の用法が出現するようになることが分かる。また、「聞き手との共通認識を要求しない」場合の「話し手の一方的な評価の提示」という用法に関して、日本語母語話者は日常生活でよく使用する（BTSJ の結果から）のに対して、中国語母語話者では 1 例しか観察されなかった。韓国語母語話者は中国語母語話者とは異なり、第 3 期から先に「聞き手との共通認識を要求しない」場合の「話し手の一方的な評価の提示」という用法を使用し始め、第 4 期から「聞き手との共通認識を要求する」場合の用法が出現するようになる。また、「話し手の一方的な」評価の提示」という用法の使用に関して、日本語母語話者と同じように常に使用することが分かった。

このように韓国語母語話者と比べ、「話し手の一方的な評価の提示」という用法を回避する現象は中国語母語話者特有の特徴であることが明らかとなったが、C-JAS コーパスは 2 つのグループの協力者のデータのみしか含まれておらず、ほかの言語を母語とする学習者のデータはない。また、学習者のレベルは不明であるが、来日時期から判断すると、協力者は中級レベルに限られている。そのため、この現象は協力者の母語に関連するのか、レベルに関連するのか、中国語母語話者は上級レベルになっても「話し手の

一方的な評価の提示」という用法を回避する現象はまだ残っているのか、などの疑問は C-JAS コーパスだけでは明らかにならない。

結果③：中国語話者・韓国語話者が各時期における、「ジャナイデスカ」の不適切な使用とその原因について

本研究は学習者の不適切な使用は原因ごとに意図的に共有知識の見積もりに失敗するパターン、否定辞として使われるパターン、ほかの不適切な使用のパターンという 3 つのパターンに分けた。

「パターン 1：意図的に共有知識の見積もりに失敗する場合」

中国語母語話者 2 例・韓国語母語話者 14 例

不適切な使用例文 1（元彼氏の現状についての話）

N：あーそう、へー、今その人はどうしてるの？

L：うん、たぶんぐんだい[軍隊]に、男の子はみんなぐんだい[軍隊]に行くから、たぶん、この、まだいるじゃないか、3 年間だから。

（K3 第 4 期 C-JAS コーパス）

不適切な使用例文 2（韓国の兵役の制度についての話）

N: 25 歳ぐらいは早いの？

L：韓国の場合は男がにじゅうなな[27]、ぐらい、やり[やはり]あれが兵役があるから一、日本よりたぶん男の子 3 歳ー4 歳ぐらい遅れてるん、遅いじゃないですか？

（K2 第 5 期 C-JAS コーパス）

洞澤(2012) が指摘するように、聞き手にとって一般的または既定的な既知情報ではなく、例文 (1)、(2) のような場面で未知情報について使用されると、相手に自分のことを知ってほしいという気持ちが込められている。これはポライトネス理論 (BROWN&Levinson 1987、田中他 2011) における FTA(フェイス侵害行為) の概念に関連する。聞き手にとって未知情報が既知情報のように扱われることは聞き手のネガティ

ブフェイスを侵す FTA となる。このように聞き手が共通認識を想起できない事柄に関し、確認を要求したり、自己修正の機能として用いたりするのは、相手に唐突または押し付け感を与える恐れがある。それが「ジャナイデスカ」を使用するとき聞き手に違和感を与える理由であると考えられる。

「パターン 2：否定辞として使われる場合」

(中国語母語話者 1 例・韓国語母語話者 2 例)

(不適切な使用例文 3)

L: なんかもものすごく曖昧というか、〈あ〉、はっきり言わないの、ものが;

N: あ、そうだね

L: うん

N: 曖昧やね

L: ん、それがあんまり、自分のタイプじゃないかと思った、うん ”

(C2 第 6 期 C-JAS コーパス)

本研究が取り扱う「ジャナイデスカ」については、田野村 (1988) は「発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。『ない』を含むとはいえ、前に来る表現の内容が否定されているわけではない」と指摘している。例文 (3) の場合は、前後文脈から、発話者 N は「そういうような人は自分のタイプではない」という否定的な意味を表そうと思っているが、「じゃないか」を使用されると、肯定的な意味になってしまう。

パターン 3 ほかの不適切な使用

(中国語母語話者 0 例・韓国語母語話者 1 例)

(不適使用例文 4)

ま、色々、この先生は少し若いですが、それで、〈はい〉もう私が、もう少し、もうとか、ほんとに、私の一、他の先生じゃん、少し、うーん、こっこう[高校]、中学 3 年生の時

でとか好きですけどー、もう少し歳が、老けるでっす「です」なにになに?) 老ける?ふげる「老ける」?これ” (K2 第 1 期)

これは韓国語母語話者の来日 3 か月 ごろに出現する発話である。この「ジャナイデスカ」の意味用法はうまく理解できておらず、日本語母語話者が使用しているのをまねて産出される発話だと思われる。

5.2.5 C-JAS コーパスにおける、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向

以上の結果を踏まえて、縦断的なデータを通して、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向を以下のようにまとめた。

- a) 来日 1 年半の時期に、「ジャナイデスカ」は集中的に使用されているものの、その時点での使い方は日本語母語話者に不快な印象や違和感を与えることがあり必ずしもその運用が成功しているとは限らない。しかし、2 年半の時点では使用数も減り、違和感も減ることが明らかとなった。これは中国語母語話者、韓国語母語話者共通の使用傾向だと考えられる。
- b) 中国語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用回数は日本語母語話者、韓国語母語話者より極端に少ない。韓国語母語話者は「ジャナイデスカ」を過剰に使用する現象がある可能性が高い。
- c) 韓国語母語話者とは違って、中国語母語話者の「ジャナイデスカ」の使用は「聞き手との共通認識を要求する」用法から「聞き手との共通認識を要求しない」用法への移行する傾向が観察される。
- d) 「ジャナイデスカ」の用法から見ると、中国語話者には「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用はあまり見られない。

C-JAS コーパスを通して、韓国語母語話者と比べ、中国語母語話者による「ジャナ

イデスカ」の使用上の特徴が確認されたが、**C-JAS** コーパスはこの 2 つのグループのデータしか含まれないので、ほかの言語を母語とする学習者の使用状況はまだ不明である。また、学習者のレベルは示されておらず、来日時期から見ると、大部分の学習者は中級レベルに限られており、「ジャナイデスカ」の各用法の使用はレベルによって、どのような違いがあるのかもまだ不明である。したがって、中国語を母語とする日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用上の特徴を明らかにするため、学習者のレベルを統制し、ほかの言語を母語とする学習者のデータを増やして検討する必要がある。

5.3 横断的なコーパス調査

C-JAS コーパスを通して、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の縦断的な使用傾向が明らかとなった。韓国語母語話者と比べ、中国語母語話者による「ジャナイデスカ」の出現時期が遅く使用数は少なく、「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できないということが分かったが、**C-JAS** コーパスは学習者のレベルが示されておらず、二つの異なった言語を母語とする学習者のデータしか含まれていない。そのため、**C-JAS** コーパスからの現象は学習者のレベルや母語によって、どのような違いがあるかについては不明である。そこで、今回は学習者のレベルを分け、もう一つ言語、英語を母語とする日本語学習者のデータが含まれる横断的な **KY** コーパスについて分析することとする。

5.3.1 KY コーパスについて

KY コーパスにおける、学習者は中国語を母語とする日本語学習者、韓国語を母語とする日本語学習者、英語を母語とする日本語学習者 30 名ずつからなる。学習者のレベルは **OPI** の判断結果を基準とする。中国・韓国・英語を母語とする学習者のそれ

ぞれの 30 人は、初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつとなっている。

5.3.2 調査目的

本研究は縦断的なコーパスを利用して、以下の 2 つのことを明らかにする。

- a) 中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者の各レベルにおける「ジャナイデスカ」の使用回数を調査する。
- b) 本研究の「ジャナイデスカ」の用法・機能分類に基づいて、中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者の各レベルにおける「ジャナイデスカ」の使用を用法ごとに分類する。

5.3.3 分析方法

タグ付き KY コーパスの文字列検索を用い、「ジャナイデスカ」を含む文を抽出する（否定文、引用文を除く）それらの文中での用法・機能を劉（2008）の用法分類に基づいて分析する。

5.3.4 分析結果

結果①：中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者の各レベルにおける「ジャナイデスカ」の使用回数

表 7 各レベルにおける「ジャナイデスカ」の使用回数

レベル 母語	初級	中級	上級	超級	合計
中国語母語話者	0	0	21 (25.9%)	10 (18.9%)	31
韓国語母語話者	0	2	32 (39.5%)	25 (47.2%)	59
英語母語話者	0	1	28 (34.6%)	18 (34.0%)	47
合計	0	3	81 (100%)	53 (100%)	137

表 7 から分かることを以下の 2 点にまとめる。

- I. 中国語話者・韓国語話者・英語話者は上級レベルになると、「ジャナイデスカ」を多く使用するようになる。
- II. 各レベルにおいて、中国語話者の使用数雅一番少ない。

結果②：学習者の母語別による、「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況を見てみる。

表 7 から、初級・中級レベルにおいて、中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者ともに使用数は少ないので、用法分類は難しい。ここでは上級・超級レベルのみに注目し、各レベルにおいて、中国語話者・韓国語話者・英語話者による「ジャナイデスカ」の各用法の使用状況を確認した。

表 8 上・超級レベルにおける、「ジャナイデスカ」の各用法の使用数

用法 母語	判断結果 の提示	話し手の一 方的な評価 の提示	認識生成の 誘導	記憶喚起 の要求	合計
中国語母語話 者	10 (33. %)	6 (20. 0%)	11 (36. 7%)	3	30 (100%)
韓国語母語話 者	13 (26. 0)	18 (36. 0%)	15 (30. 0%)	3	49 (100%)
英語母語話者	8 (22. %)	11 (30. 6%)	14 (38. 9%)	2	35 (100%)

表 8 の数値やパーセント表記から、学習者の母語別による各用法の産出にも多少の差が存在することが確認された。これらの差が統計学的に有意であるかを検証するため、カイ二乗検定を行った。カイ二乗検定の残差分析の結果、「判断結果の提示」と「認識生成の誘導」という用法に関して 3 ヶ国の学習者の間に有意差が認められない。(p 値 >.05)「話し手の一方的な評価の提示」という用法のみ、三つのグループの学習者の間に有意差が認められる。(p 値=.044<.05) つまり、学習者の母語別による、「話し手の一方的な評価の提示」の使用は異なる。

5.3.5. KY コーパスにおける、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向

以上の結果を踏まえて、横断的なデータを通して明らかとなった、日本語学習者による「ジャナイデスカ」の使用傾向を以下のようにまとめる。

- a) 初級・中級レベルにおいては、中国語母語話者 0 例、韓国語母語話者 2 例、英語母語話者 1 例と、どの母語話者も使用数は少ないが、上級・超級になると、韓国語母語話者 55 例、英語母語話者 37 例、中国語母語話者 30 例使用数が増えていることが観察された。
- b) 上級・超級レベルになると、中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者が「ジ

「ジャナイデスカ」の使用数が増えていき、「判断結果提示」「話し手の一方的な評価の提示」「認識生成誘導」「記憶喚起の要求」というような多くの用法が出現し、用法のバリエーションも徐々に増えている。

- c) 上級・超級レベルになっても、韓国語母語話者・英語母語話者と比べ、中国語母語話者の使用数は少なく、C-JAS コーパスで中国語母語話者の使用数が少なかった「話し手の一方的な評価の提示」という用法については、韓国語母語話者 18 例、英語母語話者 11 例であった。それに対して、中国語母語話者の使用数はやはり少なく、6 例しか観察されなかった。また、産出した 6 例の中の、5 例は「いいじゃないですか」という限られた形式で出現していた。

これまでの縦断・横断的なコーパスを通して、日本語母語話者による「ジャナイデスカ」の使用傾向が明らかとなったと同時に、韓国語母語話者・英語母語話者と比べ、中国語母語話者の使用上の特徴も確認された。中国語母語話者は「ジャナイデスカ」の使用を回避する可能性が高く、また、日常会話において、日本語母語話者がよく使用する「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できないようである。しかしながら、「ジャナイデスカ」の各用法の出現回数は発話場面によって異なるはずである。コーパスという調査形式では、学習者の発話場면을統一することはできず、厳密な比較は困難である。そこで、本研究は、コーパスから得られた現象、すなわち、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」という用法を中国語母語話者はうまく運用できないという現象について、3 か国の学習者を同様な発話場面を設定した。アンケート調査を行う。

第6章 「ジャナイデスカ」の使用に関するアンケート調査

6.1 予備調査

調査方法およびテストの場面設定の妥当性を検証するために、本調査を実施する前に予備調査を実施した。

6.1.1 調査時期

予備調査は2017年8月上旬から9月上旬までに実施した。

6.1.2 調査協力者

調査協力者は日本の大学に在学している日本語母語話者10名、N1に合格した中国語母語話者2名、韓国語母語話者1名、英語母語話者1名、合計14名であった。日本語母語話者を調査した理由としては、アンケートの各問題の場面設定の適切さを検証したいためである。設定された問題内容は本研究の調べたい「話し手の一方的な評価の提示」という用法に合っているか、設定された発話場面において、「ジャナイデスカ」という表現が使用するのは可能かを検証したい。コーパス調査の結果から、日本語学習者は上級およびそれ以上のレベルになると、「ジャナイデスカ」という表現が使えるようになることが分かった。本研究はそれを踏まえた上で、日本語学習者を上級レベルに定めた。また、予備調査を実施する際、協力者の日本語レベルは日本語能力試験の結果により判定した。尚、N1合格済みの学習者を上級レベルと見なした。

6.1.3 調査方法

産出レベルにおける学習者の「話し手の一方的な評価の提示」の使用を見る際に、文完成テストを実施した。また、知識レベルにおける学習者の「話し手の一方的な評価の提示」の習得状況を把握するために、文法性判断テストを実施した。

調査の実施順序は、(1)、(2) の順である。

(1) 文完成テストを実施

協力者が当事者に文完成テストを受けてもらう。協力者にロールカードを配布し、会話状況をよく読んでもらって、「あなた」のところに適切だと思う文末表現を入れてもらうという形で行う。

(2) 文法性判断テストの実施

続いて、文法性判断テストを実施した。日本語学習者による「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識レベルと産出レベルでの違いを明らかにするため、文法性判断テストは文完成テストと同じ発話場面を設定した。ただし、文法性判断テストの内容が文完成テストの回答にヒントを与える可能性があり、それに応じて協力者は文完成テストの回答を修正する恐れがあると考えられるため、文法性判断テストの問題用紙は文完成テストの問題用紙を回収した後に配布した。問題の構成については、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」に関する問題やダミー問題を、質問紙の中に提示した。問題は計 20 問であった。ダミー問題は「ジャナイデスカ」以外の文末表現に関する問題で構成する。計 10 問であった。

6.1.4 予備調査の結果

予備調査は、主に調査方法およびテスト内容の妥当性を検証するための調査であるため、それに応じて調査結果を述べていく。

調査は文完成テスト、文法性判断テストの順で実施したが、その理由は協力者にそれが「ジャナイデスカ」に関する調査であることを意識させないためである。その点については、協力者によると、文完成テストと文法性テストでは「文末表現」に関する調査であることが分かったが、具体的にどのような文末表現について調査されているのかを

はわからなかった。このことから、調査の実施順序について妥当であると判断した。文法性判断テストについて、文末表現を下線を引いて、それらの表現が与えられた文脈の中で自然かを判断してもらった。日本語母語話者の協力者からのコメントによると、文末表現の自然さはその表現のイントネーションに深くかかわっているので、イントネーションを明白にしたほうが良いことが分かった。本研究が取り扱う「ジャナイデスカ」は下降イントネーションに限る。それらを統一するため、日本語母語話者の許可を得て、読み上げてもらった会話内容を録音した。（「ジャナイデスカ」の部分は下降イントネーションに統一する）本調査の予定では、協力者がその音声を聞きながら、その文末表現の自然さを直感的に判断してもらう。また、テストの内容の妥当性については、文法性判断テストに大きな問題は見当たらなかったが、細かい箇所を多少修正した。文完成テストには、発話場面によって、「ジャナイデスカ」の出現率が低い問題はいくつかある。それらの問題は日本語母語話者に協力をしてもらって、「ジャナイデスカ」の出現しやすい発話場面に調整した。それに関しては 6.1.5 で述べたい。

6.1.5 予備調査による変更点

予備調査により、文完成テストの調査資料を一部修正した。具体的には表 9 のようになる。

表 9 予備調査による文完成テストの場面設定の変更点

予備調査	本調査
<p>問題 2</p> <p>あなたは、意外に難しい言葉を知っている王さんに対する評価を表すとき、何を言いますか？ 下線部に適切だと思ふ表現をすべて入れてください。</p> <p>王さん：古いよね、「宵越しの金は持たない」、とか、って言いますよね。</p> <p>あなた：おお、むずかしい言葉知っている_____。</p>	<p>問題 2</p> <p>先生が、意外に難しい言葉を知っている教え子の王さんをほめるとき、何と言うと思いますか？ 下線部に適切だと思ふ表現を全て入れてください。</p> <p>王さん:「宵越しの金は持たない」、とか、って言いますよね。</p> <p>先生:おお、むずかしい言葉知っている_____。(その他に適切な表現があれば書いてください。_____/_____/_____)</p>
<p>問題 4</p> <p>あなたはお見合い 16 回で、17 回目で意外に似合いそうな相手のできた友達と話しています。 下線部に適切だと思ふ表現をすべて入れてください。</p> <p>あなた：お見合い 16 回で、やっといい人に出会ったんだから、いいこと</p>	<p>問題 4</p> <p>あなたは、お見合い 6 回目で、自分に合いそうな相手に出会いました。このことを友達に伝えるたら、友達は何と言うと思いますか。下線部に適切だと思ふ表現全て入れてください。</p> <p>あなた:お見合い 6 回って、長い道乗りだったよ。</p> <p>友達:まあ、やっといい人に出会ったんだから、良かった_____ (その他に適切な表現があれば書いてください。_____/_____/_____)</p>
<p>問題 7</p> <p>友達：あの先生、40 歳で、教授になったんだって</p> <p>あなた：うそ、すごい若い<u>じゃん</u> (じゃないか)</p>	<p>問題 7</p> <p>友達:うちの先生、40 歳で、教授になったんだよ。</p> <p>あなた:うそ、すごい若い<u>じゃん</u>。(じゃないか)</p>
<p>問題 16</p> <p>あなた：お見合い 16 回で、やっといい人に出会ったんだから、いいこと<u>じゃん</u> (じゃないか)</p>	<p>問題 16</p> <p>あなた:お見合い 6 回って、長い道乗りだったよ。</p> <p>友達:まあ、やっといい人に出会ったんだから、良かった<u>じゃん</u> (じゃないか)</p>

6.2 本調査

6.2.1 調査概要

本調査は 2017 年 10 月から 11 月中旬まで約 1 か月半の間に実施した。調査方法はア

ンケート調査である。調査場所は主に首都圏の各大学および日本語学校で行った。

6.2.2 調査協力者の構成

本調査の調査協力者の構成については以下の表 10 にまとめる。

表 10 本調査の調査協力者の構成

調査協力者	上位群の中国語母語話者	10 名	40 名
	上位群の韓国語母語話者	10 名	
	上位群の英語母語話者	10 名	
	日本語母語話者	10 名	

本調査における、日本語学習者の協力者は上級レベルに限る。理由としては、コーパス調査の結果から、日本語学習者は上級レベルになると、「ジャナイデスカ」を産出できるようになるためである。本研究はそれを参照した上で、上級レベルの学習者を対象とする。

学習者のレベルについては、本研究は日本語能力試験と SPOT テストの成績と滞日期間の 3 つの要素を合わせて判定した。協力者の具体的な日本語能力の状況は以下の表 11 のようになる。

表 11 調査協力者の日本語レベル状況

中国語母語話者 (CS)				韓国語母語話者 (KS)				英語母語話者 (ES)			
学習者番号	日本語能力試験	SPOT 点数	滞日時間	学習者番号	日本語能力試験	SPOT 点数	滞日時間	学習者番号	日本語能力試験	SPOT 点数	滞日時間
CS1	N1	83	6 年	KS1	N1	82	2 年	ES1	無	81	2 年
CS2	N1	76	2 年	KS2	N1	80	2 年	ES2	無	75	2 年半
CS3	N1	80	2 年	KS3	N1	85	8 年	ES3	N1	78	1 年
CS4	N1	83	2 年	KS4	N1	76	1 年	ES4	N2	80	6 年
CS5	N1	82	2 年	KS5	N1	80	8 年	ES5	無	83	6 年
CS6	N1	80	2 年 3 か月	KS6	無	78	1 年半	ES6	N1	79	2 年半
CS7	N1	81	3 年	KS7	N1	87	1 年	ES7	N2	84	10 年
CS8	N1	81	4 年	KS8	N1	75	1 年	ES8	N1	80	1 年
CS9	N1	84	3 年	KS9	N1	85	1 年半	ES9	N2	79	1 年半
CS10	N1	76	4 年	KS10	N1	82	10 年	ES10	無	81	2 年
平均値		80.6				81				80	

日本語能力試験の結果からみると、大部分の中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習は N1 を合格している。それに対して、英語を母語とする日本語学習者は日本語能力試験を受けない者が多い傾向にある。この場合は、SPOT テストの成績を参考にする。SPOT テストは筑波大学が開発した、学習者の実際の日本語運用能力を推定する目的で作られたテストである。3 カ国の学習者の SPOT テストの成績について、学習者の母語を被験者間要因とし、一元的な分散分析を行った。結果として、学習者の SPOT の点数の間に有意差は認められなかった。(P 値 0.78 > .05) このことから、3 カ国からの学習者は同じ上級レベルに属すると判定した。C-JAS コーパスの調査

結果によって、中国語を母語とする日本語学習者は目安として来日 2 年以上、韓国語を母語とする日本語学習者は来日 1 年以上になると、「ジャナイデスカ」を使えるようになることが分かった。このことを考慮したうえで、調査協力者を探す際、来日 2 年以上の中国語母語話者と来日 1 年以上の韓国語母語話者を選定した。

6.2.3 研究課題

アンケート調査はコーパス調査から得られた仮説を検証するために実施する。

縦断・横断のコーパスの結果によって、韓国語母語話者・英語母語話者と比べ、中国語母語話者は上級レベルになっても、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できないことが確認された。これは学習者の母語である中国語の影響を受けている可能性があるのではないかという仮説を立てることができる。

第二言語習得において、学習者は目標言語の言語項目のルールを知っていても、実際には使えない場合が多く存在する。これらは「言語知識はあるが言語運用に結びついていない」ということである。(迫田 2002)

このことを考えると、上述の現象は果たして中国語母語話者が「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識がないことによって起きるか、それとも知識を持っているが運用できないことによって起きるかについての検証が必要だと考えられる。以上の内容をまとめて、本研究の研究課題を以下の 2 点に設定する。

研究課題 1 「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は母語に影響されるか。

研究課題 2 課題 1 は知識レベルと産出レベルの違いはあるのか。

6.2.4 調査内容と方法

上述の研究課題 1 と研究課題 2 を明らかにするため、本調査は「ジャナイデスカ」の「一方的な評価の提示」という用法を中心に、知識レベルの文法性判断テストと産出レベルの文完成テストから構成する。

「話し手の一方的な評価の提示」という用法とは、話し手の発話時以前の認識と発話時の状況から生じる話し手の中での認識のギャップが存在するとき、意外性や驚きの気持ちを込めて、評価を表すものである。(劉 2008)

(12) (料理が苦手な友達が意外においしい料理を作ってくれました。この料理について話すとき。) めっちゃうまそう じゃないか (じゃん) (劉 2008)

本調査の問題構成は以下の表 12 のようになる。

表 12 アンケートの構成

内容 テスト	「話し手の一方的な 評価の提示」	タミー問題	合計
文完成テスト 順番 1	10 問	0 問	10 問
文法性判断テスト 順番 2	10 問	10 問	20 問

学習者の知識レベルと産出レベル間の違いを明らかにするため、文完成テストの場面はと文法性判断テストと同様の設定にした。文完成テストの調査手続きは以下のとおりである。調査は全て、個別で行った。例文を挙げながらやり方を説明し、回答方法を把握させ本調査を行った。

文法性判断テストは 20 問からなっている。そのうち、「ジャナイデスカ」の「話し手

の一方的な評価の提示」の用法は問 3、5、7、10、12、14、16、18、19、20 計 10 問であった。また、調査協力者には「ジャナイデスカ」に関する調査だと意識させないため、タミー問題も入れた。タミー問題は「ジャナイデスカ」以外の文末表現に関する問題計 10 問であった。奥野（2005）が指摘するように、文法性判断テストは学習者が目標言語項目を即時的処理を求めるテストである。学習者が音声を聞きながら、即時的に○×判断するテストは学習者の直感的な知識を測定できるものだと考えられている。文法性判断テストの手続きは以下のとおりである。まず、やり方を説明し、回答方法を把握させた。1 問練習を行い、テープの音量や早さを確認した。問題がなければ、本調査を実施する。

文完成テストと文法性判断テストの具体的な例は以下のようになる。

まず文完成テストを見ていく。

文完成テスト：

会話状況をよく読んで、下線部に適切だと思う文末表現を入れてください。

あなたは、友達と一緒に買い物をしています。友だちがだぼだぼなジャケットを試着しましたが、意外に似合っていることを伝えるとき、何と言いますか。下線部に適切だと思う表現を全て入れてください。

あなた:うん、なかなか似合ってる_____。(その他に適切な表現があれば書いてください。_____/_____/_____)

次は文法性判断テストについて説明する。

文法性判断テスト：

以下の下線部は自然だと思う場合は○を、不自然だと思う場合は×を付けてください。

○	×
自然だと思う場合	不自然だと思う場合

友達:このジャケットどうかな？

あなた:うん、なかなか似合ってるじゃん（じゃないか）。

6.2.5 調査結果

6.2.5.1 テストの数値化結果

テストの結果を統計する前に、それらを数値化した。採点基準は文完成テストと文法性判断テストを分けて説明する。

文完成テストの場合、以下の例のように、「ジャナイデスカ」が出現すれば、1点と記し、ほかの文末表現が出現するが、「ジャナイデスカ」が出現しなければ、0点と記す。問題数は10問のため、満点は10点となる。

料理が苦手な友達が意外においしい料理を作ってくれました。この料理について話
 とき、あなたは何と言いますか？下線部に適切だと思う表現を全部入れてください。
 あなた:おお、なかなかおいしそうじゃん・じゃないか・じゃないですか、見た目もき
 れいだし _____ 1 点

おお、なかなかおいしいそうね _____ 0 点

文法性判断テストの場合、ダミー問題を除く、以下のように、「ジャナイデスカ」を
 含む文を○と判断すれば1点と記し、×と判断すれば0点と記す。

(彼氏と彼女がデパートで買い物をしています、彼女が青い帽子を買おうと思って、
 彼氏に意見を聞いています。)

彼女：どう？これ、かわいいでしょう。

彼氏: うん、いいじゃん (じゃないか)、でも黒いほうがもっと落ち着いて見えると思
 う。

○ _____ 1 点

× _____ 0 点

そして、文完成テストと文法性テストの数値化の結果は以下の表 13・表 14 のよう
 なる。

表 13 文完成テストの数値化の結果

協力者番号	中国語母語話者	韓国語母語話者	英語母語話者	日本母語話者
1	4	8	5	6
2	1	7	5	8
3	6	7	7	7
4	4	8	7	8
5	1	6	7	7
6	3	7	7	8
7	1	10	8	9
8	4	7	7	4
9	4	10	6	7
10	2	7	9	6

表 14 文法性判断テストの数値化の結果

協力者番号	中国語母語話者	韓国語母語話者	英語母語話者	日本母語話者
1	10	8	8	10
2	9	10	10	10
3	9	10	9	10
4	10	10	10	10
5	9	10	9	10
6	10	10	10	10
7	8	9	9	10
8	10	8	8	10
9	10	10	10	10
10	9	10	10	10

6. 2. 5. 2 分散分析の結果

本調査は「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」という用法を中心とし行った。分析方法としては、調査協力者の母語を被験者間の要因にして、調査の形式（知識レベルのテスト・産出レベルのテスト）を被験者内要因にして、4×2 の 2 要因分散分析を行った。

協力者の母語の主効果 ($F(3, 36) = 18.47, p < .001$) が有意であったが、調査形式（知識レベルのテスト・産出レベルのテスト）の主効果 ($F(1, 36) = 220.30, p < .001$) が有意であった。協力者の母語×調査形式の交互作用は有意であった。 ($F(3, 36) = 18.83, p < .001$) 単純主効果の検定を行ったところ、(b1)「話し手の一方な評価の提示」という用法知識に関しては、協力者の母語別での差がないこと、 ($F(3, 72) = 0.78, n.s.$)、(b2) 産出に関しては、協力者の母語別の間に差があること ($F(3, 72) = 36.48, P < .001$) が分

かった。具体的には以下の表 13 のようになる。

このことから、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の習得は学習者の母語に影響されることが伺えた。また、この用法の知識と産出の間に差が存在する。知識を持っているがうまく産出できるとは言えない。本調査の形式と協力者の母語の間に交互作用も有意であった。

協力者の母語×調査形式の 1 次交互作用について以下のように明らかとなった。

表 15 協力者の母語×調査形式の 1 次交互作用の結果

effect	SS	df	MS	F	p
A(b1)	2.8750000	3	0.9583333	0.779	0.5096
A(b2)	134.6750000	3	44.8916667	36.481	0.0000 ****
error		72	1.2305556		
B(a1)	45.0000000	1	45.0000000	41.645	0.0000 ****
B(a2)	204.8000000	1	204.8000000	189.532	0.0000 ****
B(a3)	18.0500000	1	18.0500000	16.704	0.0002 ****
B(a4)	31.2500000	1	31.2500000	28.920	0.0000 ****
error		36	1.0805556		

+ p<.10、 * p<.05、 ** p<.01、 *** p<.005、 **** p<.001

表 15 から、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識の把握は母語に影響

されないが、産出は母語に影響される。また、母語別によらず、調査形式としての知識レベルと産出レベルとの間に相関性は認められなかった。

そして、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の産出は協力者の母語にどのように影響されるかについて見てみる。

表 16 母語別による「話し手の一方的な評価の提示」の産出の多重比較

pair	r	nominal level	t	p	sig.
3 - 2	4	0.0083333	9.474	0.0000000	s.
3 - 4	3	0.0125000	1.814	0.0738184	n. s.
1 - 2	3	0.0125000	8.063	0.0000000	s.
3 - 1	2	0.0250000	1.411	0.1625459	n. s.
1 - 4	2	0.0250000	0.403	0.6880341	n. s.
4 - 2	2	0.0250000	7.660	0.0000000	s.

MSe=1.230556、 df=72、 significance level=0.05000

1 は日本語母語話者、2 は中国語母語話者、3 は韓国語母語話者、4 は英語母語話者を指す。

「話し手の一方的な評価の提示」の産出の多重比較の結果から、日本語母語話者と中国語母語話者の間に差が存在し、韓国語母語話者と中国語母語話者の間に差が存在し、英語母語話者と中国語母語話者の間に差も存在することが確認された。日本語母語話者と韓国語母語話者・英語母語話者の間に差が観察されなかった。このことから、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」という用法の産出に関して、韓国語母語話者・英語母語話者には大きな問題は存在しないが、中国語母語話者

のみに問題があることが分かった。

6.2.5.3 分散分析の結果のまとめ

調査協力者の母語別による、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用についての分散分析の結果をまとめていく。

協力者の母語別による、上述の用法の使用状況は異なっている。この違いは用法の知識の把握に存在するわけではなく、産出面に存在する。韓国語母語話者・英語母語話者は用法の知識があり産出もできるのに対し、中国語母語話者の場合、知識があるとしても、必ず日本語母語話者のようにうまく産出できるとは言えない。

6.2.5.4 文完成テストにおける「ジャナイデスカ」の使用パターン

本調査は文完成テストを行ったとき、以下のような指示を協力者に与えた。

1.あなたは、彼女に振られてしまった太郎に会いました、彼の様子について話すとき、何と言いますか。下線部に適切だと思う表現を全て入れてください。

太郎:お久しぶりだね、○○（あなたの名前）。

あなた:ああ、太郎、意外と元気そう_____。(その他に適切な表現があれば書いてください_____/_____/_____)

与えられた指示から分かるように、協力者は「ジャナイデスカ」を「一番適切だと思う」の空欄に入れるか「そのほかの適切な表現だと思う」の空欄に入れるかということによって、2つのパターンに分けられる。しかし、上述の分散分析を行ったと

き、「ジャナイデスカ」をどちらのパターンで出現しても、区別なしで1点と記す。つまり、分散分析の結果から、協力者の母語別による「ジャナイデスカ」の使用パターンは明らかとはならない。したがって、今回は文完成テストを注目し、協力者の母語別による、「ジャナイデスカ」の使用パターンについて分析する。

まず、調査協力者の母語別による文完成テストの平均得点を見てみる。

表 17 協力者の母語別による文完成テストの平均得点

協力者	文完成テストの平均得点
日本語母語話者	7.0
中国語母語話者	3.9
韓国語母語話者	8.4
英語母語話者	6.8

表 17 から、文完成テストの平均得点に関して、一番高いのは日本語母語話者ではなく、韓国語母語話者であることが分かった。一番低いのは中国語母語話者である。このことから、文完成テストにおける、「ジャナイデスカ」の産出率が一番高いのは韓国語母語話者で、日本語母語話者よりも高く、一番低いのは中国語母語話者である。

続いて、協力者の母語別による「ジャナイデスカ」の使用パターンを見てみる。ここでは、協力者の母語別による、「ジャナイデスカ」を「一番適切だと思う表現」を空欄に入れてもらう平均問題数と「そのほかの適切だと思う表現」を空欄に入れてもらう平均問題数を計算した、結果は以下の図 4 のようになる。

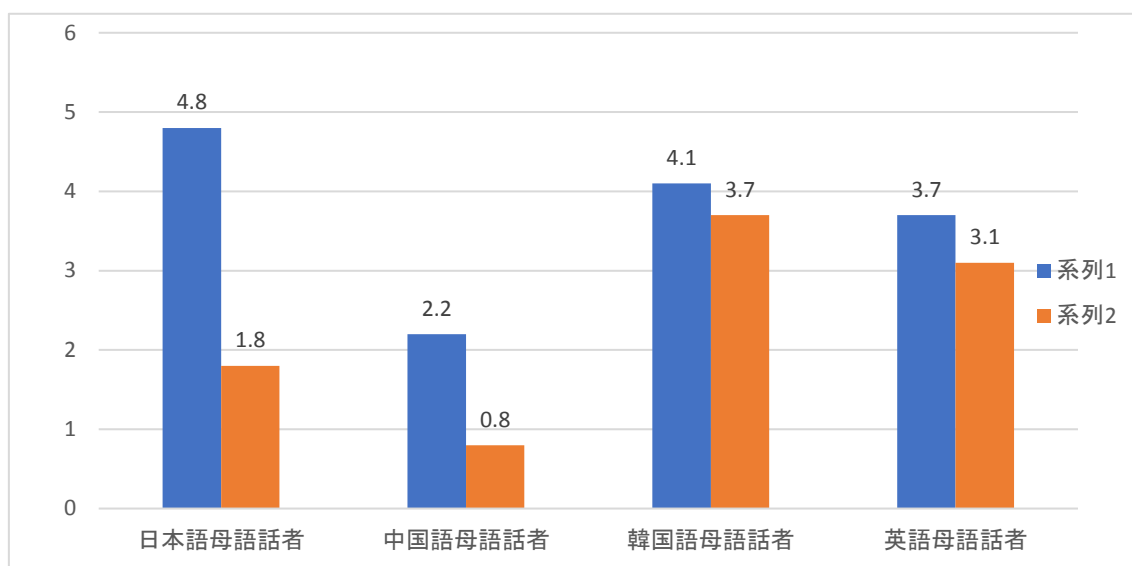


図4 文完成テストにおける協力者の使用パターン

左側の系列1の柱は「ジャナイデスカ」を「一番適切だと思う表現」の空欄に入れた平均問題数を表し、右側の系列2の柱は「ジャナイデスカ」を「そのほかの適切だと思う表現」の空欄に入れた平均問題数を表す。

日本語母語話者による、系列1と系列2の間に著しい差が観察された。このことから、日本語母語話者は「ジャナイデスカ」を使うべき場合」と「使用すると必ずしもプラスの印象を与えるとは言えない場合」を分けていることが分かった。その系列1と系列2の間に差が一番小さいのは韓国語母語話者である。このことから、韓国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用法を使えるが、「ジャナイデスカ」を使用すると、場合によって、相手に唐突または押し付け感を与える恐れがあることを意識せずに、どの場合でも、「ジャナイデスカ」を多く使用することが観察された。

続いて、協力者の母語別による、問題ごとの使用状況を見てみる。

日本語母語話者は「ジャナイデスカ」を「一番適切だと思う表現」を空欄に入れるのは問題4、6、9、10である。「ジャナイデスカ」は使えるが、一番自然ではない。「そのほかの表現の方が適切だと思う」と考えているのは問題3、7である。「ジャナイデスカ」の使用率は少ないのは問題1、2、5である。その場合は、「ね」「だな」

などの表現を使うことが分かった。

日本語母語話者は「ジャナイデスカ」をあまり使わないが韓国語母語話者がよく使っているのは問題 2、5 であり、英語母語話者が問題 5 である。日本語母語話者はよく「ジャナイデスカ」を使っているが、英語母語話者はあまり使わないのは問題 4、6 である。問題 4 の場合は英語母語話者が「ね」を多くに選択し問題 6 の場合は「ね」「よね」「よ」「と思う」「けど」などいろいろな文末表現のバリエーションが観察された。

中国語母語話者による、問題 4、6、7 以外のどの問題においても、「ジャナイデスカ」の産出はあまり見られなかった。このことから、中国語母語話者は「ジャナイデスカ」の使用を回避する現象が確認された。それらの「ジャナイデスカ」を使わない問題を分析してみると、中国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用法を表すとき、「ジャナイデスカ」を使わずに、「ね」「よね」「よ」「と思う」などの代用表現を使うことが明らかとなった。

興味深い現象として、中国語母語話者による、問題 4、6、7 では、「ジャナイデスカ」の産出率はほかの問題より高いことが明らかとなった。これらの 3 つの問題はどのような特徴があるのかについて分析する。

問題 7、友達:うちの先生、40 歳で、教授になったんだよ。

あなた:うそ、すごい若い_____。)

問題 6、彼女:どう?これ、かわいいでしょう。

彼氏: うん、いい_____。

問題 4、あなた:お見合い 6 回って、長い道乗りだったよ。

友達:まあ、やっといい人に出会ったんだから、良かった_____。

これらの 3 つの問題において、「ジャナイデスカ」の直前語はともに「若い・いい」

のような「イ形容詞」あるいは「よかった」のような「イ形容詞の過去形」であった。

このことから、中国語母語話者は「あるイ形容詞+ジャナイデスカ」というチャンクで産出している可能性が高いのではないかと考える。

6.2.5.5 文法性判断テストの結果

調査協力者の母語別による、文法性判断テストの平均得点は以下の表 18 のようになる。

表 18 協力者の母語別による文法性判断テストの平均得点

協力者	文法性判断テストの平均得点
日本語母語話者	10.0
中国語母語話者	9.4
韓国語母語話者	9.5
英語母語話者	9.3

表 18 の数値から、文法性判断テストでは、協力者の間に特に差は観察されなかった。このことから、協力者は母語別によらず、「ジャナイデスカ」の「一方的な評価の提示」という用法の知識を持っていることが分かった。

6.2.5.6 協力者の個人内の知識と産出について（フォローアップインタビューの結果から）

6.2.5.1 から 6.2.5.5 までは、文完成テストと文法性判断テストの交互作用、文完成テ

スト、文法判断テストから、協力者による「ジャナイデスカ」の使用をそれぞれ検討したが、学習者の個人内における「ジャナイデスカ」の使用はまだ不明である。つまり、文完成テストと文法性判断テストの間に個人内の差がどのようにかかわっているかは明らかにされていない。そこで、筆者は文法性判断テストで高い得点を得たが、文完成テストで低い得点を得た日本語母語話者 8、英語母語話者 2、文完成テストで満点を得た韓国語母語話者 7、中国語母語話者の中に一番高い文完成テストの得点を得た中国語母語話者 3 を中心として（表 13 に参考する）、フォローアップインタビューを行った。本節はフォローアップインタビューの結果から、それらの協力者の個人内の知識と産出に関して検討する。

表 19 フォローアップインタビューの対象とする協力者のテストの得点

協力者番号	文完成テストの得点	文法性判断テストの得点
日本語母語話者 8	4	10
英語母語話者 5	5	10
韓国語母語話者 7	10	9
中国語母語話者 3	6	9

日本語母語話者 8 は東京出身 20 代の女子大学生である。「日常生活において、こういう発話場面（文完成テストの場面）で、「ジャナイデスカ」とかあまり使わないでしょいか」と聞いてみると、「じゃないですかとじゃないかは確かにあまり使わない。理由としては、じゃないですかは書き言葉の感じが強く、こういう場面でちょっと固いかなと思います。じゃないかは結構男性っぽく使わないですね。で、じゃんとか使えるけど、私の場合はやっぱり「ね」とかよく使いますね、なんか、個人の習慣みたいな感じです。

でも、友達とか結構使っちゃいますね、普通の生活で」と答えた。

そして、英語母語話者 2 は日系企業で働いている 30 代の男性である。「日常生活において、こういう発話場面（文完成テストの場面）で、「ジャナイデスカ」とかあまり使わないででしょうか」と聞いてみると、「僕はジャナイデスカの使用に関してあまり注意していなくて、ただ、仕事で、ビジネス場面が多く、その時、ジャナイデスカを使用すると、固すぎて失礼な印象を与えるかもしれないです。なので、僕はそれよりもっと柔らかい表現のほうがいいと思います」と答えた。

このことから、日本語母語話者 8 と英語母語話者 2 とともに「ジャナイデスカ」の産出率は少ないが、産出が少なくなる原因として、日本語母語話者の場合は個人の性格や話し方に関連し、英語母語話者の場合は個人の仕事経験に関連することが分かった。

韓国語母語話者 7 は日本の大学に在学する 20 代の女性である。「日常生活において、こういう発話場面（文完成テストの場面）で、「ジャナイデスカ」などをよく使うででしょうか」と聞いてみると、「そうですね、私の場合はよく使いますね」と答えた。続けて「こういう場面で「ジャナイデスカ」を使用するとどのような意味を表すのかは知っていますか？」と来てみると、「相手はこのことを認識してほしいという気持ちですね。自分はすでに知っているけど、相手の同意を求める感じですかね。」と答えた。「韓国語において、このジャナイデスカに対応できる言葉はありませんか」と聞いてみたら、「うん、あります。それはジャナイデスカと同じ意味だと思います。発音も似ています」と答えた。

中国語母語話者 3 は日本の大学院で勉強している 20 代の女性である。「日常生活において、こういう発話場面（文完成テストの場面）で、「ジャナイデスカ」とかよく使うででしょうか」と聞いてみると、「はい、使います。私は日本のアニメやドラマとか大好きだから、じゃんという表現はよく聞いていて、そのまま使います。」と答えた。「こういう場面で「ジャナイデスカ」を使用するとどのような意味を表すのかは知っています

か？」

「私はじゃんの意味はあまり考えていなくて、ただ、じゃんを入れて読むと自然だと思います」と答えた。

このことから、韓国語母語話者による「ジャナイデスカ」の産出率が比較的に高いのは韓国語の影響を受ける可能性があるということが推測される。中国語母語話者向けのフォローアップインタビューの結果から、日本語母語話者からのインプットは「ジャナイデスカ」の習得にある程度でプラス影響を与えるが、その影響は「形式の産出」に限られていて、意味・用法上での習得はまだ影響されないことが分かった。

6.2.5.7 研究課題別の結果のまとめ

本調査の研究課題は 6.2.3 で述べたように以下の 2 つであった。

- 1 「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は母語に影響されるか。
- 2 課題 1 は、知識レベルと産出レベルでの違いは何であるのか。

本節では、6.2.5 本調査の結果という部分の内容を踏まえ、研究課題 1、2 の結果を明らかにする。

まず、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は協力者の母語に影響される。母語の影響は知識レベルに存在するわけではなく、産出レベルに存在する。つまり、協力者は母語別によらず、どのグループの協力者も「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識を持っている。しかし、産出レベルにおいて、韓国語母語話者、英語母語話者は日本語母語話者の間に有意差が認められないが、中国語母語話者と日本語母語話者の間に有意差が認められる。その差は使用頻度と使い方に分けて説明すると、まず中国語母語話者の産出率は少なく、使い方としては、「イ形容詞+ジャナイデスカ」という限られた形式で産出することである。文完成テストすなわち産出レベルのテストの各問題を分析してみると、中国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用

法を表すとき、「ジャナイデスカ」を使わずに、「ね」「よね」「よ」「と思う」などの代用表現を使うことが分かった。

第7章 総合考察

本章は上述の研究課題別の結果について総合的に考察する。

7.1 「話し手の一方的な評価の提示」用法における母語の影響

本研究は協力者の母語の主効果 ($F(3, 36) = 18.47, p < .001$) が有意であったが、調査形式（知識レベルのテスト・産出レベルのテスト）の主効果 ($F(1, 36) = 220.30, p < .001$) が有意であった。協力者の母語×調査形式の交互作用は有意であった。 ($F(3, 36) = 18.83, p < .001$) 単純主効果の検定を行ったところ、(b1)「話し手の一方的な評価の提示」という用法知識に関しては、協力者の母語別での差がないこと、 ($F(3, 72) = 0.78, n.s.$)、(b2)産出に関しては、協力者の母語別の間に差があること ($F(3, 72) = 36.48, P < .001$) が分かった。つまり、「ジャナイデスカ」が持っている「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は学習者の母語に影響されることである。

ここでは、本調査の協力者の母語において「ジャナイデスカ」に対応できる言葉に注目し、それらの表現と日本語の「ジャナイデスカ」との対照研究を通して母語の影響について検討する。

7.1.1 中国語における「不是…吗」と「ジャナイデスカ」との対照研究

中国語における「不是…吗」と「ジャナイデスカ」との対照研究について、本研究の3.2で説明したことがある。その「不是…吗」と「ジャナイデスカ」の用法間の対応関係を示す表1を再掲する。

表 1 劉(2008)による「じゃないですか」類の用法分類及び「不是…吗」の用法と

の対応関係

	「じゃない ですか」類	「不是… 吗」	例文
判断結果 の提示	○	○	<p>(9) これまでは日本農業のため、米だけは何としても守らなければならないと考えていた。しかし、おいしくて安い米があるならどこから輸入したっていい<u>じゃないか</u>、という気になってきた。</p> <p>(9') 为了日本的农业、人们常认为无论如何都必须保护大米、然而只要可以有好吃又便宜的大米先选择进口<u>不是也很好吗</u>？</p>
話し手の 一方的な 評価の提 示	○	×	<p>(10) 美：「古いのよね、宵越しの金は持たない、とか言って…」。</p> <p>純：「おっ、難しい言葉知ってる<u>じゃないか</u>」</p> <p>(10') ？ 「噢、这么难的词你<u>不是都知道吗</u>」</p>
認識生成 の誘導	○	○	<p>(11) 弘：「お前は八重ちゃん相手にしてろよ」</p> <p>誠：「(ムカッと) なんでだよ」</p> <p>弘：「八重ちゃんだって可愛い<u>じゃないか</u>」</p> <p>(11') 「八重<u>不是挺可爱的吗</u>」</p>
記憶喚起 の要求	○	○	<p>(12) 同級生に加藤さんっていた<u>じゃないですか</u>、背の高い男の子。</p> <p>(12') 「对了、<u>不是有一家最近新开的理发店吗</u>」</p>

表 1 から分かるように、「話し手の一方的な評価の提示」の用法には、「ジャナイデスカ」が使えるのに対して「不是…吗」は使えない。

「不是…吗」は「話し手の一方的な評価の提示」という用法を持ってない理由は「不是…吗」の基本的な機能にかかわっている。

劉（2008）は「ジャナイデスカ」と「不是…吗」の基本的な機能をそれぞれ次のようにまとめた。

「ジャナイデスカ」は、話し手が、聞き手も認識可能でありありながら、発話時まで認識できていなかった事柄に対する話し手の認識そのもの（知覚による情報の獲得や判断、評価など）を聞き手に表出して認識させる標識である。

「不是…吗」は、話し手が、聞き手も認識可能でありながら、発話時まで認識できていなかった事柄に対する話し手の真偽判断を聞き手に表出し認識させる標識である。

それは中国語の「不是…吗」の「是」は真偽判断を表す言葉であるということに関連する。中国語の「是」を用い、話し手の知覚による評価などのような認識そのものを表すのは困難である。

(10) 美：「古いのよね、宵越しの金は持たない、とか言って…」

純：「おっ、難しい言葉知ってるじゃないか」

(10') ? 「噢、这么难的词你不是都知道吗」

具体的な例文とあわせて考えてみると、(10) の命題内容は話し手が発話時に形成した評価や意見を直感的に表出するものである。「ジャナイデスカ」を付加することによって、今まで気づいていなかった事柄に対する話してその場での評価をそのまま述べて、自分に認識させることになる。この場合中国語では「不是…吗」だけではなく、判断を表す「是」も評価の用法で用いることは不自然である。

劉（2008）は用法・機能に焦点を当て、日中両言語の対照研究を行った。この二つの表現のニュアンス上の違いについて、曹（2000）が記述した。曹（2000）によって、中

国語の「不是・吗」は「ジャナイデスカ」と共通する機能を行う際は、常に「反駁」「原因追及」「非難」のようなニュアンスが伴われることがわかった。

第二言語習得論が指摘するように、第二言語を学習する場合に、学習者の母語がプラスに影響する場合とマイナスに影響する場合があり、前者を正の転移、後者を負の転移という。負の転移としては「回避」「過剰生成」「停滞化」というような結果が上げられる。「回避」とは、第一言語と第二言語のある言語項目の構造や使い方に違いがある場合、第二言語を使用する際にその違いのある項目を使用しないという現象である。

このように、中国語の「不是・吗」と「ジャナイデスカ」との用法上の構造は違っているという影響を受け、中国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できない。また、第5章では、縦断・横断のコーパスの結果によって、上級・超級レベルになっても、中国語母語話者による「ジャナイデスカ」の各用法の使用頻度は低く、用法のバリエーションも少ないことが観察された。これらの現象は中国語の「不是・吗」と「ジャナイデスカ」とのニュアンス上の違いによって起きる可能性が高いのではないかと考えている。

7.1.2 韓国語における「잘아」と「ジャナイデスカ」との対照研究

本調査の結果から、「話し手の一方的な評価の提示」という用法を表すとき、韓国語母語話者による「ジャナイデスカ」の産出率は最も高く、日本語母語話者よりも高いことが分かった。用法から考えると、文完成テストのすべての問題において、「ジャナイデスカ」が使える。つまり、韓国語母語話者による「ジャナイデスカ」の産出率が高いのは韓国語母語話者がこの「話し手の一方的な評価の提示」という用法を運用できることを証明する。しかし、日本語母語話者は「ジャナイデスカ」を使用するとき、用法・意味に限らず、発話場面、人間関係やポライトネスなどの要素を合わせて考えることが多い。例えば、文完成テストにおいて、問題2、5といったような発話場面では、上述

の理由によって、多くの日本語母語話者は「ジャナイデスカ」を選択しない。それに対し、韓国語母語話者は頻繁に「ジャナイデスカ」を使っている。これらは第5章縦断・横断コーパス調査の結果を合わせて考えてみると、「話し手の一方的な評価の提示」だけではなく、「ジャナイデスカ」のすべての用法に渡って、韓国語母語話者の使用頻度は高く、その上に、「聞き手との共通認識を要求する」場合の用法を表すとき、「過剰使用」という現象も観察された。韓国語母語話者における「ジャナイデスカ」の使用上の特徴は韓国語にどのような関連があるのか。本節は韓国語と日本語との対照研究を通して、その関連性を明らかにする。

池（2013）は、韓国語において、日本語の文末表現の「ジャナイデスカ」に対応できる「잖아」という表現があることを指摘する。その「잖아」の韓国語の発音は「cjana²」であり、日本語の「ジャナイデスカ」の発音と非常に似ている。「잖아」の用法に関しては、池（2013）は以下のようにまとめる。○はこの用法を持っているということを表す。

² 国際音声記号の表記を参考にする。(IPA International Phonetic international)

表 20 韓国語の「잡아」と日本語の「ジャナイデスカ」との用法対応関係

用法名	用法定義	ジャナイ デスカ	잡아	例文
想起 記憶喚起の要求	話し手と聞き手とも知っていることについて、「 <u>잡아</u> 」を使って、聞き手に再度認識させる用法	○	○	동급생중에 가토 있 <u>잡아</u> , 키 큰 남자애. 同級生の中に加藤っている <u>じやない</u> ですか (じゃないか・じやん)。背の高い男の子。
状況の仮定 認識生成の誘導	聞き手が認識できる事柄に関して、確認を要求する用法	○	○	야에도 귀엽 <u>잡아</u> . (八重ちゃん) だって可愛い <u>じやない</u> ですか (じゃないか・じやん)
理由・根拠 判断結果の提示	話し手が主張の根拠や行動の理由を表す用法	○	○	지금까지는 일본의 농업을 위해서, 쌀만은 무슨 일이 있어도 지켜내지 않으면 안 된다고 생각했었다. 하지만, 맛있고 값싼 쌀이 있다면 어디선가 수입해 와도 <u>잡아</u> 라는 생각이 들기 시작했다. これまでは日本農業のため、米だけは何としても守らなければならなかったと考えていた。しかし、おいしくて安い米があるならどこから輸入したっていい <u>じやないか</u> 、という気になってきた。
評価 話し手の一方的な 評価の提示	話し手が物事に関する評価を提示する用法	○	○	순: 어, 어려운 단어 알고 있 <u>잡아</u> . え、難しい言葉知ってる <u>じやない</u> ですか (じゃないか。じやん)

韓国語の「잖아」と日本語の「ジャナイデスカ」との用法対応関係から、意味用法において、日韓両言語の間に特に大きな差は見られないが、用法の使用範囲に関して、二つの表現の間にずれがあることが分かった。池（2013）が指摘するように、韓国語の「잖아」と日本語の「ジャナイデスカ」の使用範囲の差は「想起」「状況仮定」という二つの用法にある。つまり、日本語において、「ジャナイデスカ」の命題内容は聞き手が事前に知っているが、一時的に忘れる事柄、あるいは、聞き手が認識できる一般事実であれば、「聞き手との共通認識を要求する場合」の「記憶喚起の要求」と「認識生成の誘導」が使える。それに対し、韓国語において、「잖아」の命題内容は聞き手が認識できるかに関係なく、聞き手を認識してほしい事柄であれば、「想起」や「状況仮定」という2つの用法が使える。したがって、「聞き手との共通認識を要求する場合」の用法を表すとき、日本語の「ジャナイデスカ」とは違って、韓国語の「잖아」は、話し手と聞き手両者に共有されたものではなく、ただ話し手が共有したい事柄を前提として使われる。(池 2013)

上述のように、日韓両言語の個別用法の使用範囲に差異がある。「聞き手との共通認識を要求する」場合の用法を使うとき、韓国語の使用範囲は日本語より広い。聞き手に関係なく、認識できない事柄に関して、「잖아」を使って、確認要求を行うことができる。韓国語母語話者はこの母語からの影響受け、意図的に共有知識の見積りに失敗する場合にも、「ジャナイデスカ」を使って、聞き手に不愉快や違和感を与える可能性が高いのではないかと考えられている。

7.1.3 英語における「Don't you」と「ジャナイデスカ」との対照研究

日本語の「ジャナイデスカ」や英語の「Don't you」いった形式は、否定辞を伴った疑問形式であるため、対応できる形式だと認識される。同じ文法的範疇に収まるもののなにより、その用法機能は言語間で異同を明らかにする先行研究は管見限りにそんなに多くな

い。

落合（2006）は課題解決型にタスクを行う日本人やアメリカ人のディスコースにおいて、日本語や英語の否定疑問文がそれぞれどのように用いられ、どのように機能しているかについて、議論を行う。

分析の結果は以下のようにまとめる。

- (1) 日英語共通して、否定疑問文は自分の意見や提案を述べるときに用いられる。
- (2) 英語の否定疑問は「区別型」と特徴付けられ、相手に特別な態度を示す相互作用的機能を持っている。
- (3) 日本語の否定疑問は「和合型」と特徴付けられ、相手に和合的な態度を示す相互作用的な機能を持っている。

つまり、否定疑問文の根源的な機能は、日英語間で差が見られないものの、それらが持つ態度は異なる。すなわち、英語では、相手と異なった認識を持っている物事を伝えるが、日本語では、逆に、歩み寄り、寄り添っていることを相手に伝達するのである。このように日英語において、否定疑問文の根源的な機能には共通性があることは英語母語話者の否定疑問文の習得にプラスの影響を与えるのではないかと考えられている。

7.2 「話し手の一方的な評価の提示」の用法の知識レベルと産出レベルにおける母語の影響

単純主効果の検定を行ったところ、(b1)「話し手の一方的な評価の提示」という用法知識に関しては、協力者の母語別での差がないこと、($F(3, 72) = 0.78, n.s.$)、(b2)産出に関しては、協力者の母語別の間に差があること ($F(3, 72) = 36.48, P < .001$) が分かった。つまり、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識の把握は母語に影響されない。つまり、学習者の母語によらず、「話し手の一方的な評価の提示」という用

法の知識を持っている。しかし、この用法の産出は学習者の母語に影響される。中国語母語話者はこの用法の知識を持っているが、うまく産出できないということではないだろうか。

言語知識について説明するとき、第二言語習得論において、宣言的知識と手続き知識という二つの概念がある (J、Anderson 1982)。宣言的知識を学習者の言語構造の知識であるとし、手続き的知識をその知識を基にして実際に運用するための手続きのこととしている。具体的な例を挙げて説明しよう。「わかる」と「できる」という言葉がある。一般的に物事の習得は、「わからなくて、できない」状態から「わかって、できる」状態へ進むことである。その途中の段階として、「わからないけれども、できる」あるいは「わかっているけれども、できない」という状態が存在する。「わからないけれども、できる」場合の例としては、鉄棒の逆上がりや自転車乗りがあるだろう。逆上がりがなぜできるようになったかは説明できないけれども、いつの間にかできるようになる。それに対して、「わかっているけれども、できない」場合の例としては、水泳の呼吸の仕方はわかっているけれども、実際では泳げない場合などが当てはまる。つまり、「わかる」は頭の中で整理された知識、宣言的知識であり、「できる」はその方法に関する知識、つまり手続き的知識であるといえる。

アンケート調査の結果から、中国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用法の知識を持っているが、実際に運用するのは難しい。これは上述の宣言的知識と手続き知識の理論を合わせて考えると、「ジャナイデスカ」の「話し手の一方的な評価の提示」に関して、中国語母語話者の宣言的知識と手続き知識がうまく結びついていないことが分かった(迫田 2002)。

第 8 章 本研究のまとめと今後の課題

本研究は、日本語学習者の母語別による、確認表現としての「ジャナイデスカ」の各用法の使用実態について、縦断・横断のコーパス調査を行った。さらに、コーパスから得られた中国語母語話者の使用上の特徴、すなわち、「話し手の一方的な評価の提示」の用法をうまく運用できないという現象について、知識レベルおよび産出レベルにおいてアンケート調査を通して検討した。コーパスとアンケートの分析結果からそれぞれ以下のことが明らかになった。

- (1) 本研究の縦断データ (C-JAS コーパス) の分析の結果、日本語学習者は来日半年の時期から、「ジャナイデスカ」を使い始めるが、その時の使用数は少なく不適切使用も存在することが明らかとなった。来日 1 年半の時期から、使用数は多くなり、用法のバリエーションも増えていることが分かった。韓国語母語話者は韓国語における「잖아」の使用範囲はより広いという影響を受け、「ジャナイデスカ」の過剰使用の現象が観察された。用法から見ると、「話し手の一方的な評価の提示」は、中国語母語話者全体に 1 例しか認められなかった。
- (2) 横断データ (KY コーパス) の分析結果、上級・超級レベルになっても、韓国語母語話者、英語母語話者と比べ、中国語母語話者の使用数は少なく、「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できないことが確認された。それは「ジャナイデスカ」に対応する中国語表現「不是…吗」は「話し手の一方的な評価の提示」という用法を持っておらず、使用される際は常に「反駁」「非難」といったようなマイナスのニュアンスが伴われるという影響を受ける可能性が指摘できる。
- (3) アンケート調査は、「話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は学習者の母語に影響されるか、その影響は知識レベルに存在するか、それとも産出レベルに存在するかを検討するため、中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話

者を対象として、アンケート調査を行った。分散分析の結果から、話し手の一方的な評価の提示」という用法の使用は協力者の母語に影響される。母語の影響は知識レベルに存在するわけではなく、産出レベルに存在することが分かった。産出において、中国語母語話者と日本語母語話者の間に有意差が認められた。つまり、中国語母語話者は母語の影響を受け、「話し手の一方的な評価の提示」という用法をうまく運用できないことが確認された。その差は使用頻度と使い方に分けて説明すると、まず中国語母語話者の産出率は少なく、使い方としては、「あるイ形容詞+ジャナイデスカ」という限られた形式で産出する。文完成テストすなわち産出レベルのテストの各問題を分析してみると、中国語母語話者は「話し手の一方的な評価の提示」という用法を表すとき、「ジャナイデスカ」を使わずに、「ね」「よね」「よ」「と思う」などの代用表現を使うことが分かった。

これらの結果、中国語母語話者と韓国語母語話者はそれぞれの母語の影響で「ジャナイデスカ」の各用法の知識を持っているが、日本語母語話者のように運用するのは難しいことが明らかとなった。したがって、学習者に、より日本語話者らしい日本語を学習させるためには、どのような場合で「ジャナイデスカ」を使うべきか、どのような場面で「ジャナイデスカ」を避けた方がいいか、各用法とその使われる場面を合わせて明示的に教える必要があると考えられる。

本研究は確認表現の「じゃないですか」「じゃないか」「じゃん」という三つの形式しか取り扱ってない。今後は確認要求機能を持っている「じゃないの」「じゃない？」などもっと幅広い表現について検討する必要がある。また、本研究は単文ではなく、複文における「ジャナイデスカ」の意味。用法の習得状況について検証したが、談話レベルにおける機能についてあまり触れていない。メイナード(2005)が指摘するように、話し言葉における否定疑問表現の談話機能は以下のようにまとめられる。

- 1 推定: あの人、今日はお休みじゃない?
- 2 勧誘: 一緒に行かない?
- 3 驚き・発見: あら、山田さんじゃないですか
- 4 非難: こんなに頼んでも助けてくれないのか
- 5 納得: ケンカかと思ったらプロレスじゃないか。
- 6 依頼: ちょっと席をはずしてもらえませんかね。
- 7 願望: 雨が上がらないなあ。
- 8 命令: おい、やめないか。
- 9 断定の婉曲表現: その方がいいんじゃないでしょうか。

今後は、日本語学習者による、「ジャナイデスカ」だけではなく、すべての否定疑問表現を対象として、それらの表現の談話機能の習得状況について検討していく。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導頂いた教官の奥野由紀子准教授に深く感謝の意を表します。御多忙中にもかかわらずいつも熱心かつ親切にご指導くださり、本研究の全般に渡り多少なるご支援、ご協力を、また、研究の過程で適宜ご指導くださいました。心から深く御礼申し上げます。また、長谷川守寿准教授は本研究のコーパス調査の枠組みや分析方法などについてご助言くださいました。深く感謝いたします。

本研究を完成させるまで、本当に多くの方々にご協力いただきました。調査に参加してくれた日本語学習者と日本語母語話者の皆様に深く感謝しております。おかげさまで、貴重な研究データを得ることができました。

最後に、奥野ゼミの皆様からいつも貴重なご意見や励ましを頂きました。心より感謝いたします。

参考文献

- 井上優・黄麗華(2007)「日本語と中国語の真偽疑問文をめぐって」『日中対照言語学研究
論文集』和泉書院 pp.35- 57.
- 奥野由紀子・金庭久美子・山森理恵（2012）「「じゃないですか」「じゃん」「じゃない」
の確認要求表現を用いた段落形成」Nineteenth Princeton Japanese Pedagogy Forum
PROCEEDINGS pp.157-168.
- 奥野由紀子(2005)『第二言語習得における言語転移の研究』風間書房
- 金京実（2000）「中間言語としての確認要求表現「よね」「だろう」「じゃないか」－韓
国人日本語学習者を中心として」『人間文化学研究収録』10,大阪府立大学大学院人
間文化学研究科・総合科学研究科 pp.7-58.
- 迫田久美子(1997)「中国語話者における指示詞コ・ソアの言語転移」『広島大学日本語教
育学科紀要』7, pp.63-72.
- 迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』
- 鈴木洋子（2004）「確認を要求する日本語応答期待文の文末形式とその機能—母語話者と学
習者の使用から」『応用言語学研究』6,pp.249-261.
- 曹泰和(2000)「反語文の“不是...吗”？について—日本語と比較しながら—」『中国語学』
247, pp.311-327.
- 生天目知美（2009）「日本語学習者による確認要求表現の特徴—OPI データにおける母
語話者との比較」『東京大学留学生センター教育研究論集』15,pp.59-74.
- 張興（2004）「ではないか」の用法について」『世界の日本語教育』14，国際交流基金
pp.193-205.

張雅智 (2004) 「『ではないか』の用法」『言語科学論集』東北大学大学院文学研究科言語科学 8, pp.37-48.

メイナード・泉子・K (2005) 『日本語教育現場で使える談話表現ハンドブック』

劉雅静 (2008) 「否定“不是...吗”？と「ではないか」の用法・機能について」『言語記と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究』 pp.139-156.

劉雅静 (2008) 「『デハナイカ』の用法間の関連性について」言語学論叢 1 号 pp.筑波大学 pp. 86-102.

三宅知広 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』 89 号 pp.111-122.

蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為」仁田義雄編『複文の研究下』くろしお出版社 pp. 389-419.

石井和仁 (1998) 「日本語口語表現の分析—『…ジャナイデスカ』について」『福岡大学人文論叢』 30 号福岡大学研究推進部 pp. 925-936.

田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』 152, 国語学会 pp. 123-109.

松丸真大 (2001) 「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』 3, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室 pp. 33-48.

谷部弘子 (2016) 「日常談話に見る確認表現『ジャナイ』『ジャン』の実相」『談話資料日常生活のことば』ひつじ書房 pp. 173-189.

Schachter, J. (1974) An error in error analysis. Language Learning 24:2, 205-314.

池 玫京 (2013) 「文末表現による共通認識領域の構築：日本語の『じゃないか』と韓国語の『-잖아』を中心に」韓国語学年報 9, 神田外語大学韓国語学会 編 pp. 79-99.

洞澤 伸・高木 穂菜未 (2012)「若者たちにおける「～じゃないですか」のコミュニケーション機能 :聞き手の印象と反応」岐阜大学地域科学部研究報告 31, 岐阜大学地域科学部 編 pp. 25-41.

Brown&Levinson (1987) 「日本語会話におけるポライトネス--Brown&Levinson(1987)の妥当性を中心に」『言語科学』34, 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会 pp. 51-60.

落合 るみ子(2006)「日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問--文化的志向性の議論を交えて」『日本女子大学紀要』56 日本女子大学, pp. 131-144.

嶺田 明美(2001)「愛知県東部方言における文末詞についての研究(2)文末詞ジャンの首都圏における用法との比較」学苑 3 pp. 65-72.